秋田県文化財調査報告書第419集

寺　ヶ　沢　Ⅲ　遺　跡

―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―

２００７・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろさか）遺跡

出土の「岩偶」です。

縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩

寺ケ沢Ⅲ遺跡

―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―

２００７・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備や国道の建設は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に先立って、平成17年度に実施した寺ヶ沢Ⅲ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代・平安時代の遺物や中世の炭窯が見つかり、平場が少ない馬の背状の尾根をも生活域とした当時の人々の生活の一端を垣間見ることができました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力いただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、由利本荘市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年３月

秋田県教育委員会
教育長　根　岸　　均

例　言

1　本報告書は、平成17年度に行った寺ヶ沢Ⅲ遺跡の発掘調査成果を収めたもので、一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては１冊目にあたる。

2　調査の内容についてはすでにその一部を埋蔵文化財センター年報などによって公表しているが、本報告書を正式のものとする。

3　本報告書の執筆は、第5章を除き吉川寿朗が行った。

4　『第5章　自然科学的分析』は、株式会社加速器分析研究所に業務委託した分析報告である。

凡　例

1　本報告書に使用した図は、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供の工事路線計画図1,000分の1と、国土地理院発行の50,000分の1地形図『矢島』である。

2　本報告書で使用した土色の色調表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2004年版によった。

3　遺構については、検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判明したものは欠番とした。遺構に使用した略記号は以下の通りである。

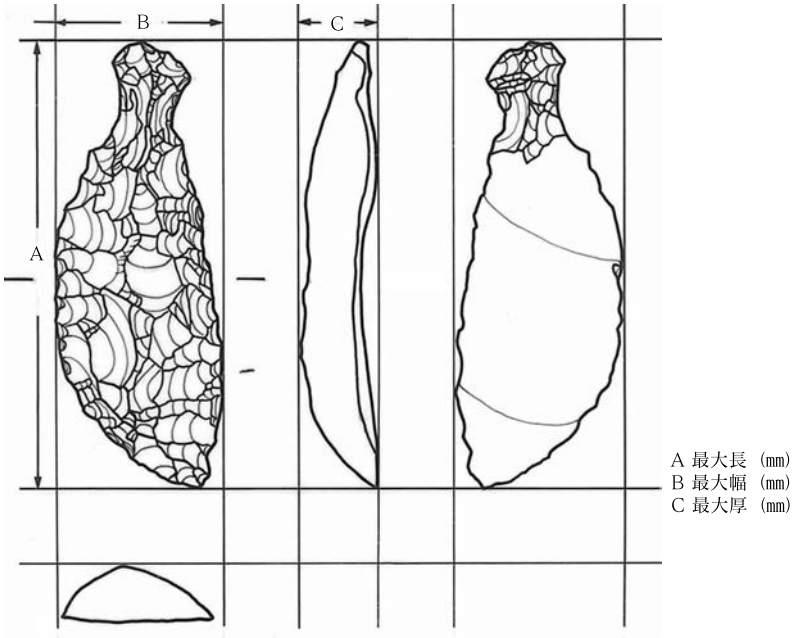
SK（土坑）　SW（炭窯）　SKP（柱穴様ピット）　SX（性格不明遺構）

4　挿図中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

焼土・被熱痕　　磨面

5　縄文土器と土師器の拓本は、断面の左側に外面、右側に内面を配している。

6　石器の計測部位は下図の通りである。計測値の単位は長さ・幅・厚さが㎜、重さがｇである。



目　次

序
例言・凡例
目次

第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……1

第２章　遺跡の環境……2
　第１節　遺跡の位置と立地、地質……2
　第２節　歴史的環境……4

第３章　発掘調査の概要……7
　第１節　遺跡の概観……7
　第２節　調査の方法……7
　第３節　調査の経過……7
　第４節　整理作業の方法と経過……8

第４章　調査の記録……9
　第１節　基本層序……9
　第２節　検出遺構と出土遺物……9
　第３節　遺構外出土遺物……18

第５章　自然科学的分析……26

第６章　まとめ……28

図版

報告書抄録・奥付

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業は、にかほ市両前寺を起点とし由利本荘市二十六木を終点とする全長12.5kmを、高規格幹線道路として整備する事業である。

仁賀保本荘道路が整備されることにより、日本海沿岸地域の交流・連携が促進されるとともに、緊急車両の速やかな往来の確保や県内外から訪れる観光客の交通手段として利用されることが大いに期待される。事業は平成12(2000)年に着手され、日本海沿岸東北自動車道と連結するための整備が進められている。

秋田県教育委員会は、平成15年度から計画路線内を対象とした遺跡分布調査を実施した。寺ヶ沢Ⅲ遺跡は、平成16年度の分布調査により新たに発見された遺跡で、平成16年12月に遺跡確認調査が行われた。その結果、土坑や柱穴などが検出され、縄文時代の土器や石器も出土したことから、集落跡の存在が確認された。このため、秋田県教育委員会は国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所と協議し、発掘調査による記録保存の措置を講ずる運びとなった。発掘調査は、平成17年度に2,900㎡を対象に行われた。

第２節　調査要項

遺　跡　名	寺ヶ沢Ⅲ遺跡（てらがさわさんいせき）　遺跡略記号：６ＴＧＳⅢ
所　在　地	秋田県由利本荘市西目町西目字寺ヶ沢69-27
調 査 期 間	平成17年５月18日～７月28日
調 査 目 的	一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る事前調査
調 査 面 積	2,600㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	吉川寿朗（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事）
	開田猛夫（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事）
	打矢泰之（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査研究員）
総務担当者	柴田卓也（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任）
	田口　旭（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所・由利本荘市教育委員会

第２章　遺跡の環境

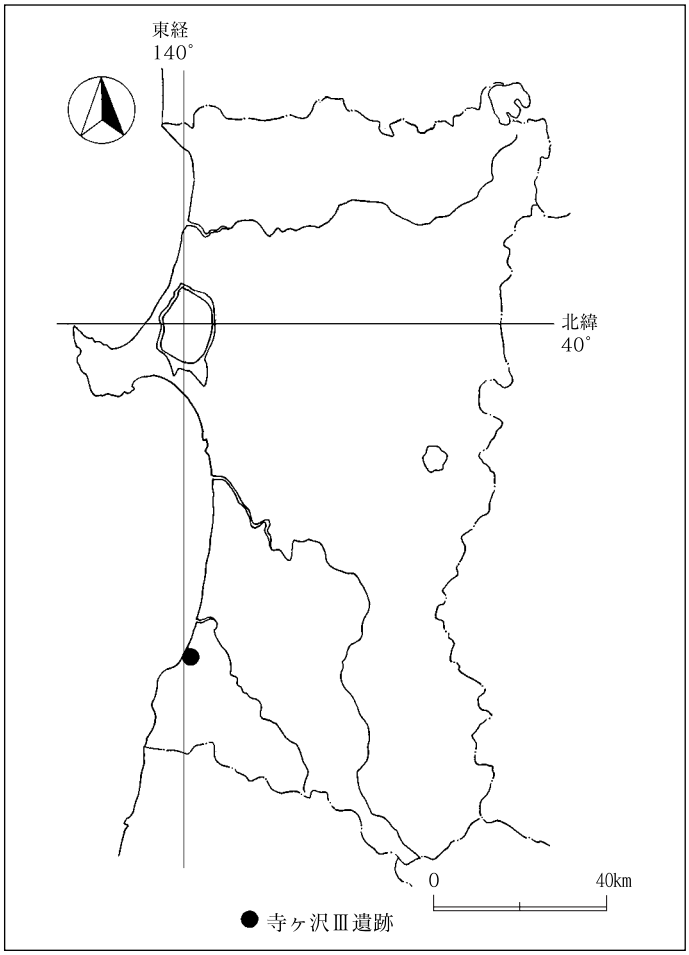
第１節　遺跡の位置と立地、地質

寺ヶ沢Ⅲ遺跡のある由利本荘市は、秋田県の南西部に位置する。平成17（2005）年３月、本荘市、由利町、岩城町、鳥海町、東由利町、大内町、西目町、矢島町の一市七町が合併し、現在の由利本荘市が誕生した。北は秋田市、南はにかほ市、山形県酒田市、遊佐町、真室川町、東は大仙市、横手市、湯沢市、羽後町と接し、西は日本海に面している。南に標高2,236ｍの鳥海山、東に出羽丘陵を背し、市の中心部を子吉川が貫流し、日本海にそそいでいる。

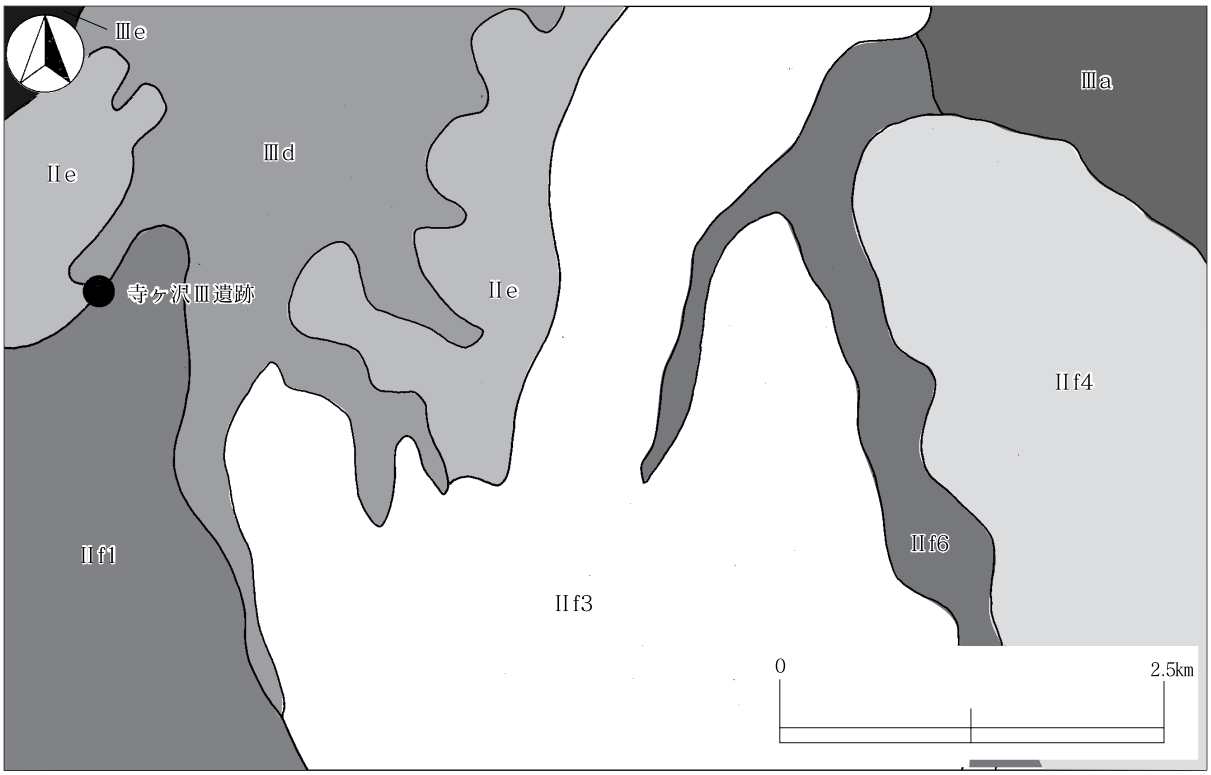
本遺跡は旧西目町、ＪＲ羽越本線西目駅から南西約3.3㎞の北緯39度18分57秒、東経140度00分27秒に位置する（第１図）。遺跡周辺の地形は丘陵地並びに台地、低地、砂丘地に三区分される。低地平野部は、過去において日本海に開口する入江を形成していた時期があったと推察されており、現在は砂丘によって海側が閉鎖されたため南北に細長い紡錘形をした盆地状の低地（西目沖積平野）になっている。この低地部は、文政年間まで一部に潟を残しており、干拓によって田圃を開発したことが記録によって知ることができる。低地部を囲む丘陵地帯は、南部に鳥海山北麓に発達する仁賀保高原の北端部とその下位に位置する孫七山の台地があり、西部には望海の丘から浜館に至る丘陵地、北方は水林の丘陵地帯となっている。また、東方には標高150～200ｍの西由利原高原がある。これら丘陵地の麓には、標高40～60ｍの台地があって低地部に接し、本遺跡の東側700ｍを、長谷地溜池（仁賀保高原）を源にする西目川が北流し、日本海にそそいでいる。

遺跡周辺の地質は、下位から新第三紀鮮新世の笹岡層、第四紀更新世の西目層、泥流堆積物、鳥海火山噴出物、古砂丘堆積物、段丘堆積物、完新世の沖積層、砂丘堆積物で構成されている。西目層は、主として軟弱な砂岩からなり、ところによって礫層および泥岩、火山灰を含んでいる。

本遺跡は西目低地を取り巻き、鳥海火山山麓地の基盤面から成る西目丘陵地、第四紀更新世に形成された西目層の中粒砂上に立地している。遺跡の標高は38～53ｍである。



第１図　遺跡の位置



Ⅱe　西目丘陵地　　Ⅱf3　西由利原火山麓地　　Ⅱf１　ハバ山丘陵地　　Ⅱf４　東由利原火山麓地
Ⅱf６　鮎川低地　　Ⅲa　子吉川低地　　Ⅲd　西目低地　　Ⅲe　西目砂丘地

第２図　遺跡周辺の地形区分図

m　砂・砂がち堆積物　　td　砂・礫がち堆積物　　Ymf　安山岩岩塊を含む火山灰・泥堆積物
Ns　細粒～中粒砂岩（礫・泥岩を伴う）　　Ss　中粒～粗粒砂岩（シルト岩・酸性凝灰岩を伴う）

第３図　遺跡周辺の表層地質図

第２節　歴史的環境

寺ヶ沢Ⅲ遺跡の周辺には各時代にわたる多数の遺跡が存在するが、ここでは旧石器時代から中世までの主要な遺跡について概観する。なお、遺跡名の次の〔　〕内の数字は、秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図（由利地区版）』に掲載された遺跡の地図番号に対応しており、アルファベットは、その後新たに追加された日本海沿岸東北自動車道関連の遺跡を示している。

１　旧石器時代の遺跡

寺ヶ沢Ⅲ遺跡近隣の旧石器時代の遺跡としては、新林遺跡〔４-12〕が挙げられる。発掘調査は行われていないが、石刃や黒曜石の剥片などが採集されており、後期旧石器時代の遺跡である。

２　縄文時代の遺跡

寺ヶ沢Ⅲ遺跡周辺で発掘調査された縄文時代の遺跡は無く、竪穴住居などは発見されていないが、池田正治氏らによって、数多くの縄文時代の遺物が採集されている。根子の沢遺跡〔41-10〕では、中期大木9式の深鉢形土器が完全な形（上部はいくつかの破片）で出土している。この土器は、農作業中に偶然発見されたものである。また、前期、後期、晩期の土器も採集されており、中には火炎土器など北陸系の土器や注口土器も含まれている。西目川右岸の水田地帯に位置する中ノ目Ⅰ遺跡〔41-21〕では、口縁部に北陸地方の特徴である半割竹管文が施され、その下の胴部には東北地方北部の円筒下層土器様式（前期）の特徴である木目状撚糸文が施された南と北の特徴を合わせ持つ土器が採集されている。

３　弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡としては、西目小学校の南側300ｍの丘陵地に立地する宮崎遺跡〔41-３〕と根子の沢遺跡〔41-21〕が知られており、弥生土器が採集されている。

４　古墳時代の遺跡

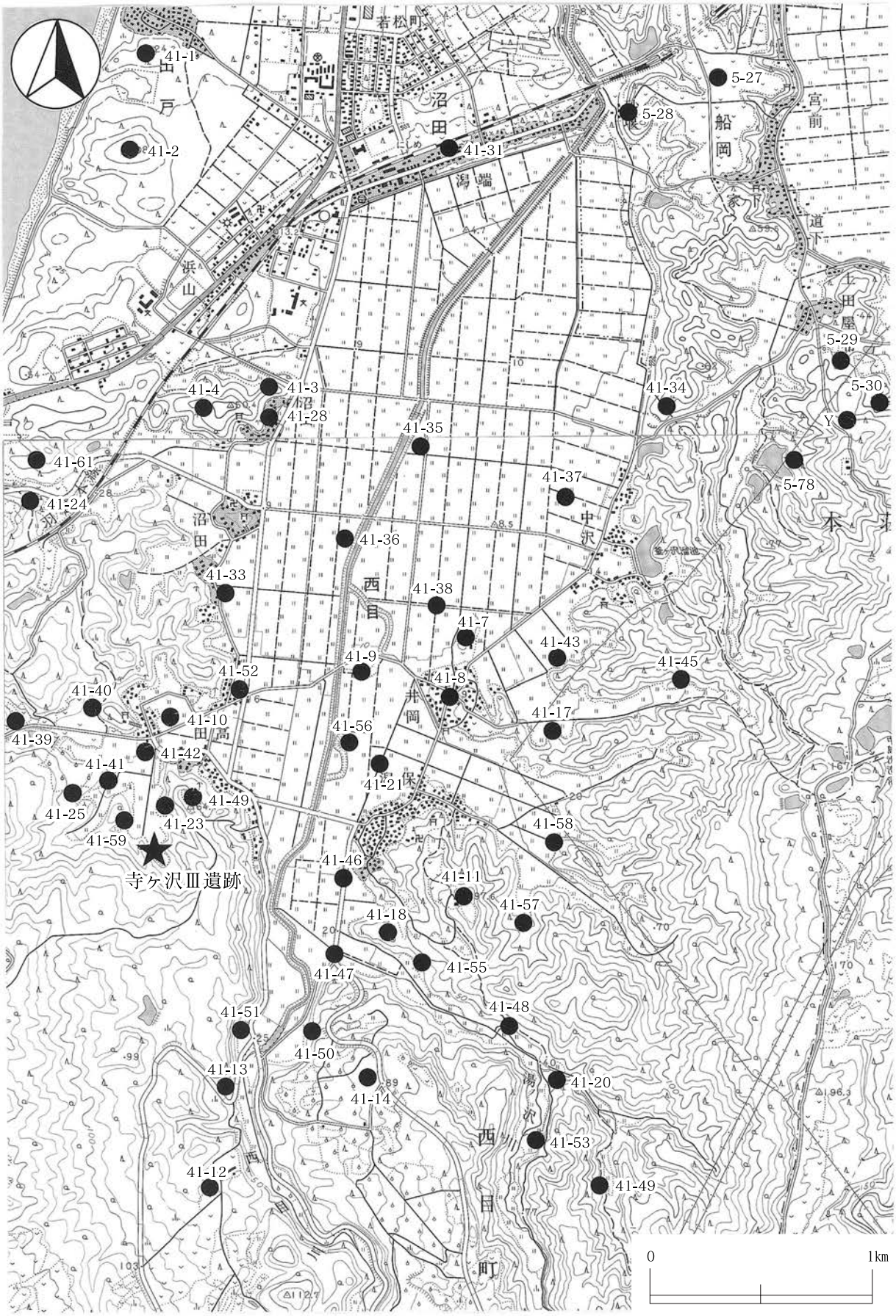
秋田県ではこの時代の古墳は発見されておらず、遺跡の数も極めて少ないが、沼田遺跡〔41-33〕、宮崎遺跡〔41-３〕では、古墳時代のものと思われる土師器片や須恵器片が採集されている。また、井岡遺跡〔41-８〕では、古墳時代中期の祭祀遺物と考えられている子持勾玉が発見されている。これは、日本海沿岸では最北の例である。

５　古代の遺跡

古代の遺跡としては、湯水沢遺跡〔Ｙ〕が挙げられる。平成16（2004）年に発掘調査が行われ、平安時代の製鉄炉５基、排滓場３ヶ所、炭窯15基などが検出された。製鉄炉や炭窯が大規模にまとまって見つかり、今後、調査内容を検討していく中で、平安時代中期の製鉄遺跡の全容が明らかになるものと期待されている。また、宮崎遺跡〔41-３〕では竪穴住居跡、井岡遺跡〔41-８〕では墨書土器が見つかっている。

６　中世の遺跡

寺ヶ沢Ⅲ遺跡の周辺には、山城や平山城等の中世城館跡が存在する。それらの多くは眺望のよくきく台地に立地し、自然地形を巧みに利用した城館である。潟保館跡〔41-11〕は、別名孔雀館といい


若松町
41-1
41-2
41-31
5-27
5-28
5-29
5-30
5-78
41-3
41-4
41-28
41-34
41-35
41-61
41-24
41-37
41-36
41-33
41-38
41-7
41-43
41-45
41-9
41-52
41-8
41-40
41-10
41-17
41-39
41-56
41-42
41-41
41-21
41-49
41-25
41-23
41-58
41-59
寺ヶ沢Ⅲ遺跡
41-46
41-11
41-57
41-18
41-55
41-47
41-48
41-51
41-50
41-13
41-14
41-20
41-53
41-12
41-49
0
1km

第４図　周辺の遺跡

標高約97ｍの丘上にある。由利郡村誌には、「東西二十三間、南北五十九間、高サ十五丈アリ」と記されているが、グラウンド造成などのために現在はその原形を窺い知ることができない。潟保氏の先祖が潟の府館と称して居住し、後、由利十二頭の一人海野弥太郎及びその子孫が居住し、諸所の戦に出陣したという。

参考文献

秋田県『土地分類基本調査　矢島』1982（昭和57）年

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（由利地区版）』2001（平成13）年

西目町史編集委員会『西目町史　資料編』1998（平成10）年

西目町史編集委員会『西目町史　通史編』2001（平成13）年

西目町史編集委員会『西目町史　年表・統計資料』2001（平成13）年

西目町教育委員会町史編纂室『西目町史研究　第3号』1998（平成10）年

第１表　寺ヶ沢Ⅲ遺跡周辺の遺跡一覧

地図番号	遺跡名	種　別	遺　構　・　遺　物	地図番号	遺跡名	種　別	遺　構　・　遺　物
5-27	船岡台	遺物包含地	縄文土器(前期末～中期)、石斧、石鏃、魚形文刻石など	41-33	沼田	遺物包含地	土師器片、須恵器片
5-28	花館	館跡		41-34	碁石	遺物包含地	縄文土器片
5-29	葛法山館	館跡		41-35	向谷地	遺物包含地	土師器片、須恵器片
5-30	葛法窯跡	窯跡	須恵器坏、高台坏	41-36	新堰	遺物包含地	土師器片、須恵器片
5-78	子吉大堤	遺物包含地	土師器片、羽口、鉄滓	41-37	中沢	遺物包含地	縄文土器片
5-81	碁石	遺物包含地	須恵器坏、高台坏	41-38	川袋	遺物包含地	土師器片、須恵器片、縄文土器片（中期）
41- 1	土花	遺物包含地	須恵器坏、高台坏	41-39	西ノ沢	遺物包含地	縄文土器片（中期）、石棒
41- 2	オシダテ	遺物包含地	縄文土器片(前期)	41-40	大西目Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片
41- 3	宮崎	遺物包含地	土師器坏、高台坏、長胴甕、須恵器、北大式土器、人骨	41-41	内山	遺物包含地	縄文土器片（中期）、須恵器片、土師器片
41- 4	エゾ館	館跡	縄文土器片(前期)	41-42	大西目Ⅱ	遺物包含地	土師器片、須恵器片、古銭
41- 7	客殿森	遺物包含地	縄文土器片（中期）、土師器片、須恵器片	41-43	堅田	遺物包含地	須恵器片
41- 8	井岡	遺物包含地	須恵器片、土師器片、子持勾玉、墨書土器	41-45	堅田沢	遺物包含地	縄文土器片
41- 9	鷹橋	遺物包含地	土師器片、須恵器片	41-46	大森	遺物包含地	土師器片、須恵器片
41-10	根子の沢	遺物包含地	縄文土器片（中期）、石棒、石匙、石皿、石鏃	41-47	大森橋	遺物包含地	土師器片、須恵器片、縄文土器片（晩期）
41-11	潟保館	館跡	腰郭、空堀	41-48	中湯沢Ⅱ	遺物包含地	須恵器片、土師器片、鉄滓
41-12	新林	遺物包含地	縄文土器片、石器片、鉄滓、旧石器	41-49	北ノ股	遺物包含地	縄文土器片（後期）
41-13	角間台	遺物包含地	石器片、縄文土器片	41-50	内野	遺物包含地	縄文土器片（中期）
41-14	中ノ道	遺物包含地	石斧、縄文土器片	41-51	松ノ木	遺物包含地	土師器片
41-17	豊後館	館跡	主郭	41-52	小深田	遺物包含地	土師器片、須恵器片
41-18	大学館	館跡	腰郭、空堀	41-53	大湯沢	遺物包含地	鉄滓
41-19	田高館	館跡	礎石	41-55	湯ノ沢	遺物包含地	須恵器片、土師器片
41-20	中湯沢Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片(晩期)	41-56	中ノ目Ⅱ	遺物包含地	土師器片、須恵器片
41-21	中ノ目Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片（前期・中期）、石鏃、石匙、石錘	41-57	館ノ後	遺物包含地	縄文土器片
41-23	寺ヶ沢Ⅰ	寺院跡		41-58	前ヶ沢	遺物包含地	土師器片、須恵器片
41-24	大股	寺院跡	礎石	41-59	寺ヶ沢Ⅱ	遺物包含地	鉄滓、羽口、須恵器片
41-25	大平	寺院跡	石碑	41-61	下山	番所跡	唐船番所跡
41-28	姜下	遺物包含地	縄文土器片	Y	湯水沢	製鉄	製鉄炉、排滓場、炭窯、鉄滓、羽口、土師器、須恵器
41-31	弁天前	番屋跡	干拓番屋跡	★	寺ヶ沢Ⅲ	遺物包含地	縄文土器片（早期、前期、後期）、土師器、石器

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

寺ヶ沢Ⅲ遺跡は、JR羽越本線西目駅から南西約3.3㎞にあり、西目川左岸の北西方向に舌状に延びる丘陵の先端部に立地する。調査区の標高は約38～53ｍで、遺跡の立地する丘陵頂部は馬の背状を呈しており、丘陵東側下方の水田面との比高差は23ｍである。

今回実施した発掘調査により、遺跡は縄文時代および古代の遺物散布地であることがわかった。

第２節　調査の方法

発掘調査は、グリッド法を採用し行った。調査区内の任意の点を原点（ＭＡ50）とし、この原点から磁北に合わせた南北基線と、これに直交する東西基線を設け、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設してグリッドを設定した。グリッド杭には、北に行くに従い51、52、53、‥‥‥という２桁の算用数字と、西に行くに従いＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ‥‥‥というアルファベット２文字を組み合わせた記号を記入した。その際、４ｍ方眼の南東隅に位置する杭を当該グリッドの名称とした。

検出した遺構は、発見順に略記号および通し番号を付し、精査を行った。

調査は表土の掘り下げ、包含層の掘り下げ、遺構精査という手順で進め、全工程を手作業で行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

実測図は平面図および断面図、写真撮影は35㎜モノクロ・リバーサルフィルムおよびデジタルカメラを用いて行った。

第３節　調査の経過

５月18日：調査開始日。発掘機材・物品等を搬入し、発電機を囲うなど環境整備作業に取りかかる。
５月19日：ベルトコンベアー搬入。調査区内の雑木撤去・草刈り作業開始。
５月20日：雑木撤去・草刈り作業終了。表土除去作業開始。
５月23日：調査区北側斜面に基本土層観察ベルトを２本設定。
５月25日：調査区南側急斜面に幅１ｍのトレンチ設定。
５月31日：由利本荘市教育委員会西目教育事務所の齋藤俊明氏と郷土史家池田正治氏が来跡。
　　ＳＫＰ01を検出。
６月２日：ＳＫ02、ＳＫ03、ＳＫ04、ＳＸ05を検出。
６月３日：ＳＸ06を検出。
６月７日：ＳＫ02、ＳＫ03、ＳＫ04、ＳＸ05の調査終了。
６月８日：国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所の鈴木之建設監督官、佐藤正人係長、石田

技官が来跡。

６月９日：ＳＸ07検出。

６月13日：ＳW08、ＳW09、ＳＫ10を検出。

６月14日：ＳＸ06、ＳＸ07の調査終了。

６月23日：ＳＸ11を検出。

６月28日：ＳＸ12を検出。

６月29日：ＳW09の調査終了。

６月30日：ＳＸ11、ＳＸ12の調査終了。

７月５日：大野憲司県文化財保護室長が来跡。

７月６日：ＳW08の調査終了。

７月13日：地形図作製開始。

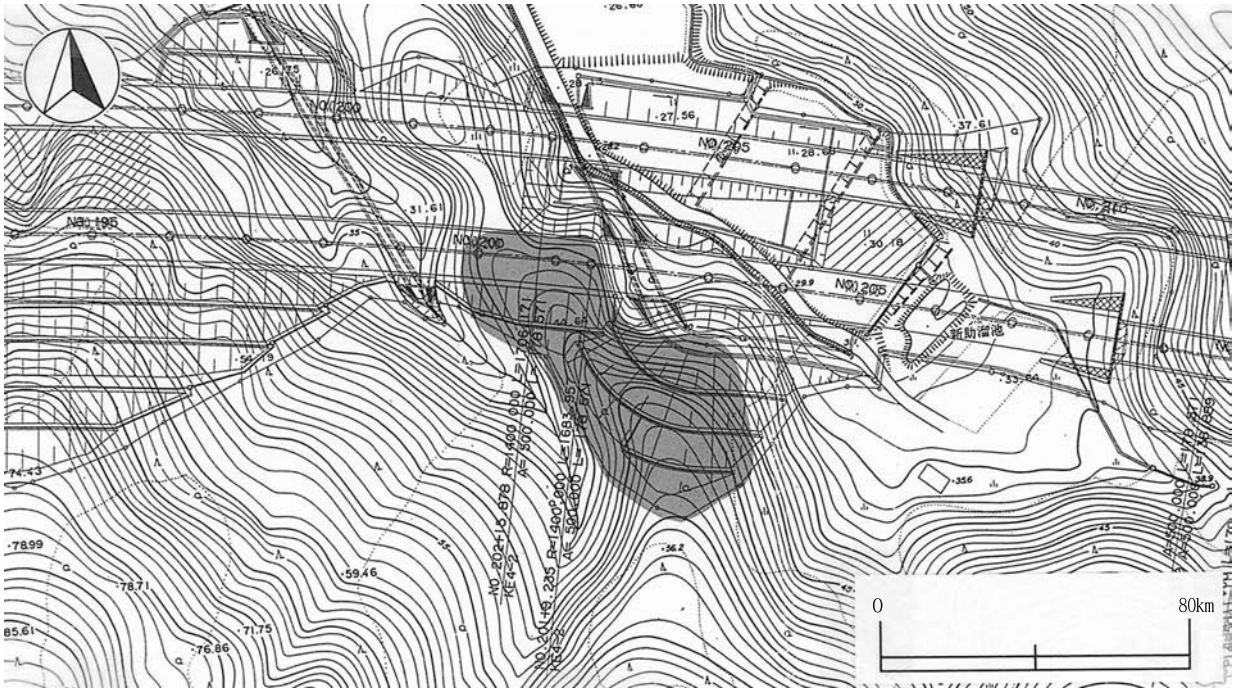
７月19日：地形図作製終了。

７月27日：国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所への調査区の引き渡しを完了する。

７月28日：出土遺物・調査機材の整理や輸送を行い、全ての調査工程を終了する。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、秋田県埋蔵文化財センター南調査課で行った。出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測・採拓・トレース・写真撮影を行った。また、遺構図面については、現場で実測した実測図をもとに第２原図を作製し、それをトレースした。自然科学的分析は、株式会社加速器分析研究所に委託した。



第５図　調査範囲図

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

調査区は先に述べたとおり馬の背状の丘陵頂部にあり、背骨にあたる部分が北西・南東のラインに重なる。その両側が急斜面になっており、調査区全体を通して平坦部はほとんど無い。

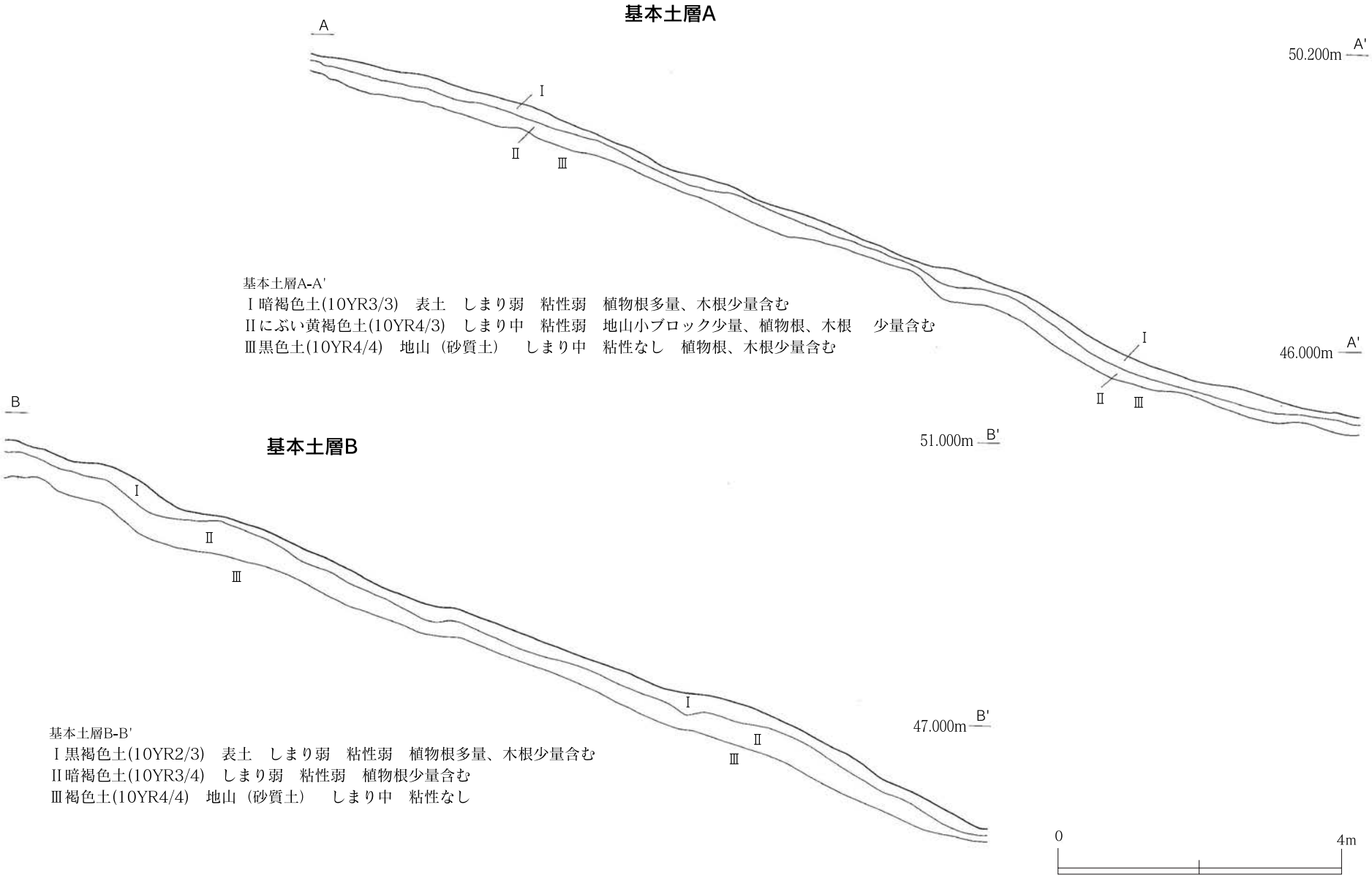
遺跡の基本層序（第６図）は、部分的に確認調査時に掘り込まれたトレンチの壁面を利用して調査区南東側の斜面部にトレンチを２本設定（基本土層Ａ、基本土層Ｂ）し、土層断面を観察した。基本土層Ａにおいては、Ⅰ層が表土（層厚２～14㎝）、Ⅱ層がにぶい黄褐色土（層厚４～14㎝）、Ⅲ層が褐色土（地山）である。基本土層Ｂにおいては、Ⅰ層が表土（層厚４～18㎝）、Ⅱ層が暗褐色土（層厚４～24㎝）、Ⅲ層が褐色土（地山）である。Ａ、Ｂの層序に大きな違いは無く、Ⅱ層が遺物包含層および遺構確認面であるが、Ⅰ層からも遺物が出土している。

第２節　検出遺構と遺物

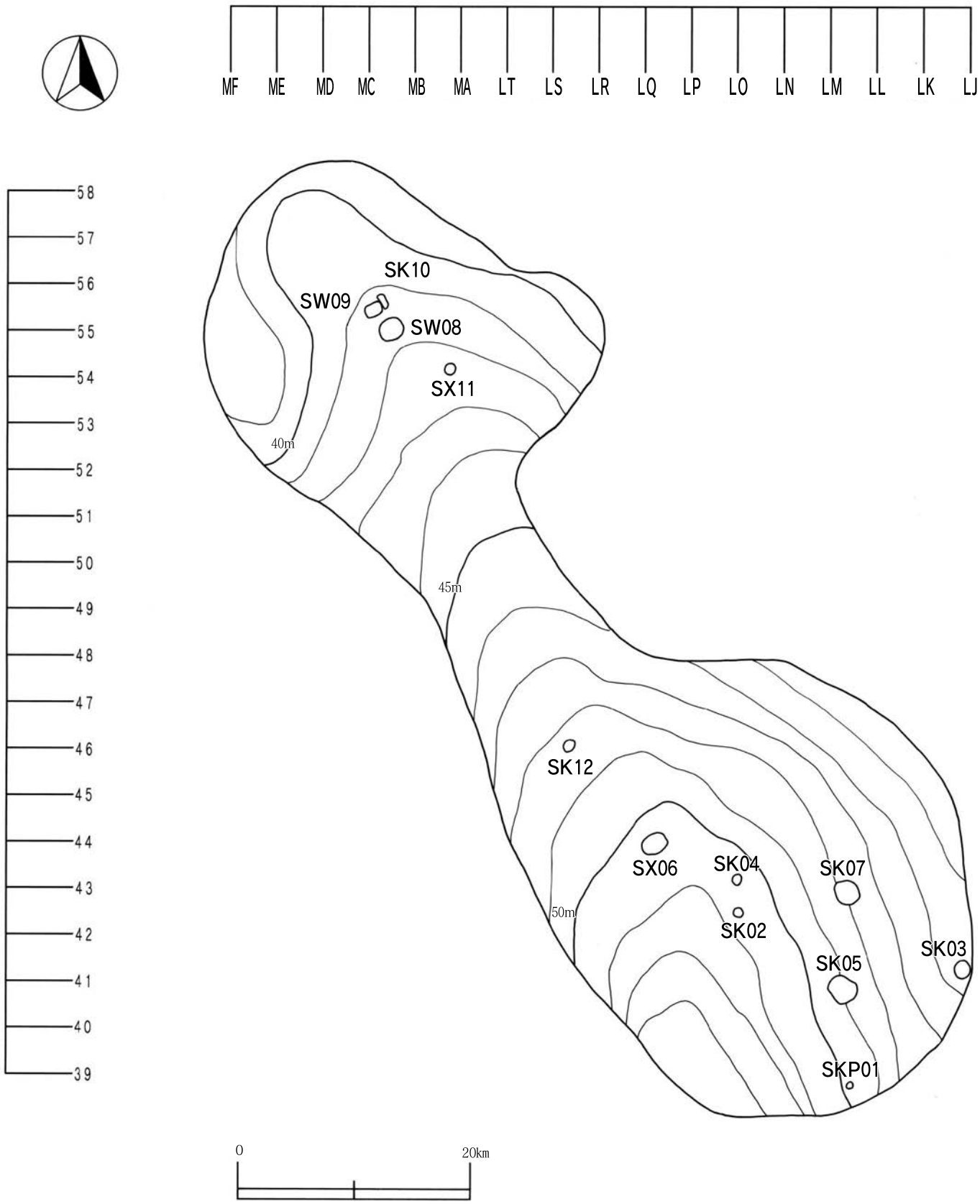
本調査で検出した遺構は、土坑７基、炭窯２基、柱穴様ピット１基、性格不明遺構２基の計12基である。これらの遺構の帰属時期は、遺物の出土した３基の遺構を除いて不明確であるため、時代別ではなく、土坑、炭窯、柱穴様ピット、性格不明遺構の順序で図示し、それぞれに項目を設け記述している。

第２表　検出遺構一覧

記号	番号	種　別	挿図番号	図版番号	備　考
ＳＫＰ	０１	柱穴様ピット	10	2	
ＳＫ	０２	土坑	8	1	
ＳＫ	０３	土坑	8	1	
ＳＫ	０４	土坑	8	1	
ＳＫ	０５	土坑	8	1	
ＳＸ	０６	性格不明遺構	11	2	
ＳＫ	０７	土坑	9	2	
ＳＷ	０８	炭窯	10	2	
ＳＷ	０９	炭窯	10	2	
ＳＫ	１０	土坑	9	2	
ＳＸ	１１	性格不明遺構	11	2	
ＳＫ	１２	土坑	9	2	
ＳＸ	１３	性格不明遺構			欠番
ＳＸ	１４	性格不明遺構			欠番


基本土層A
A
A'
50.200m
46.000m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
基本土層A-A'
Ⅰ暗褐色土(10YR3/3)　表土　しまり弱　粘性弱　植物根多量、木根少量含む
Ⅱにぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり中　粘性弱　地山小ブロック少量、植物根、木根　少量含む
Ⅲ黒色土(10YR4/4)　地山（砂質土）　しまり中　粘性なし　植物根、木根少量含む
基本土層B
B
B'
51.000m
47.000m
基本土層B-B'
Ⅰ黒褐色土(10YR2/3)　表土　しまり弱　粘性弱　植物根多量、木根少量含む
Ⅱ暗褐色土(10YR3/4)　しまり弱　粘性弱　植物根少量含む
Ⅲ褐色土(10YR4/4)　地山（砂質土）　しまり中　粘性なし
0
4m

第６図　基本土層図


MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
LL
LK
LJ
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
SK10
SW09
SW08
SX11
40m
45m
SK12
SX06
SK04
SK07
50m
SK02
SK03
SK05
SKP01
0
20km

第７図　遺構配置図

１.土坑

ＳＫ02（第８図、図版１）

ＬＮ42グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。確認調査時のトレンチにより南西側が５分の１程度削られているが、現状から推定すると長径98㎝、短径80㎝の不整な楕円形平面をなす。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面から底面までの深さは最深部で18㎝である。覆土は黒褐色土を基調とする単一層で、斜面上方からの流入による自然堆積と考えられる。覆土中より縄文土器片が出土した。単節ＲＬ縄文を斜位回転施文している。縄文前期の所産と考えられる。

ＳＫ03（第８図、図版１）

ＬＪ41グリッドの急斜面に位置し、Ⅲ層で確認した。長径154㎝、短径136㎝の不整な円形平面をなす。底面は斜面の傾斜に平行し、平坦である。壁は急傾斜に立ち上がり、確認面から底面までの深さは最深部で26㎝である。覆土は暗褐色を基調としており、炭化物や地山ブロックを含む単一層で、人為堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ04（第８図、図版１）

ＬＮ43グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。確認調査時のトレンチにより北側が５分の１程度削られているが、現状から推定すると長径100㎝、短径76㎝の楕円形平面をなす。底面は平坦で、壁は急傾斜に立ち上がり、確認面から底面までの深さは26㎝である。覆土は黒褐色を基調としており、地山ブロックや炭化物を含む単一層で、人為堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ05（第８図、図版１）

ＬＬ40・41グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。長径262㎝、短径223㎝の不整な方形平面をなす。底面は斜面の傾斜に平行で、平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、確認面から底面までの深さは最深部で17㎝である。覆土は黒褐色を基調としており、地山ブロックや炭化物を含む単一層で、人為堆積と考えられる。覆土からは縄文土器が２点出土した。縄文時代後期の所産と考える。

ＳＫ07（第９図、図版２）

ＬＬ42・43グリッドに位置し、Ⅲ層で確認した。円形を基調として北西側に短い張り出しを持つ不整な平面形をなし、長径240㎝、短径208㎝を測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面から底面までの深さは30㎝である。覆土は３層に分層した。１・２層は黒褐色を基調としており、１層では炭化物が少量認められ、２層からは縄文土器片が出土した。３層は灰黄褐色の砂質土である。堆積状況から、斜面上方からの流入による自然堆積と考えられる。出土した土器片を可能な限り接合復元した結果、１は深鉢形を呈することが分かった。胴部は緩やかに膨らみ、口縁が外反し、口唇部・口縁部は丁寧に撫でられ無文帯を形成している。頸部以下には地文として撚糸文が施され、この地文の上に２条１対の沈線によって倒卵文が描かれる。以上のような特徴から、１は宮戸Ｉｂ式土器に比定されるものと考える。

ＳＫ10（第９図、図版２）

ＭＢ55グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。確認調査時のトレンチにより、遺構の大半が削平されているが、現状から推測すると長方形の平面プランになると思われる。また、近接するＳＷ08の開口部が底面よりも外側に大きく張り出していること、覆土がＳＷ08の１層と似ていること、断面を観察すると隣接するＳＷ09の壁の立ち上がりの延長と本遺構の壁のラインがほぼ一致することから、本遺構はＳＷ09の残存部と考えられ、ＳＷ09と同一遺構である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

ＳＫ12（第９図、図版２）

ＬＳ46グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。長径100㎝、短径94㎝の不整形な円形平面をなす。底面は平坦で、壁は南側では急傾斜に、北側ではそれよりも緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは28㎝である。覆土は２層に分層した。１層は暗褐色を基調とした砂質土で、底面を覆う２層は、褐色を基調とした砂質土である。堆積状況から斜面上方からの流入による自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

２.炭窯

ＳＷ08（第10図、図版２）

ＭＢ55・ＭＣ55グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。確認調査時のトレンチにより大部分が削平され、北東側の一部と最深部で16㎝の底面部のみが残存する。全体像は不明であるが、現状から推定すると、開口部で長径188㎝、短径180㎝、底部で長径132㎝、短径90㎝の略楕円形平面をなすと思われる。壁は残存する部分では外傾して立ち上がり、壁高は最大60㎝を測る。覆土は３層に分層され、全体的に炭化物が混じり、３層は径３～15㎜の炭化材を多く含む炭化物層となっていた。底面はほぼ平坦で、特に南側では被熱により赤色変化した焼土が多く認められた。なお、採取した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、ＢＰ750±30の年代値が得られ、樹種はクリと同定された（第５章参照）。遺物は出土しなかった。

ＳＷ09（第10図、図版２）

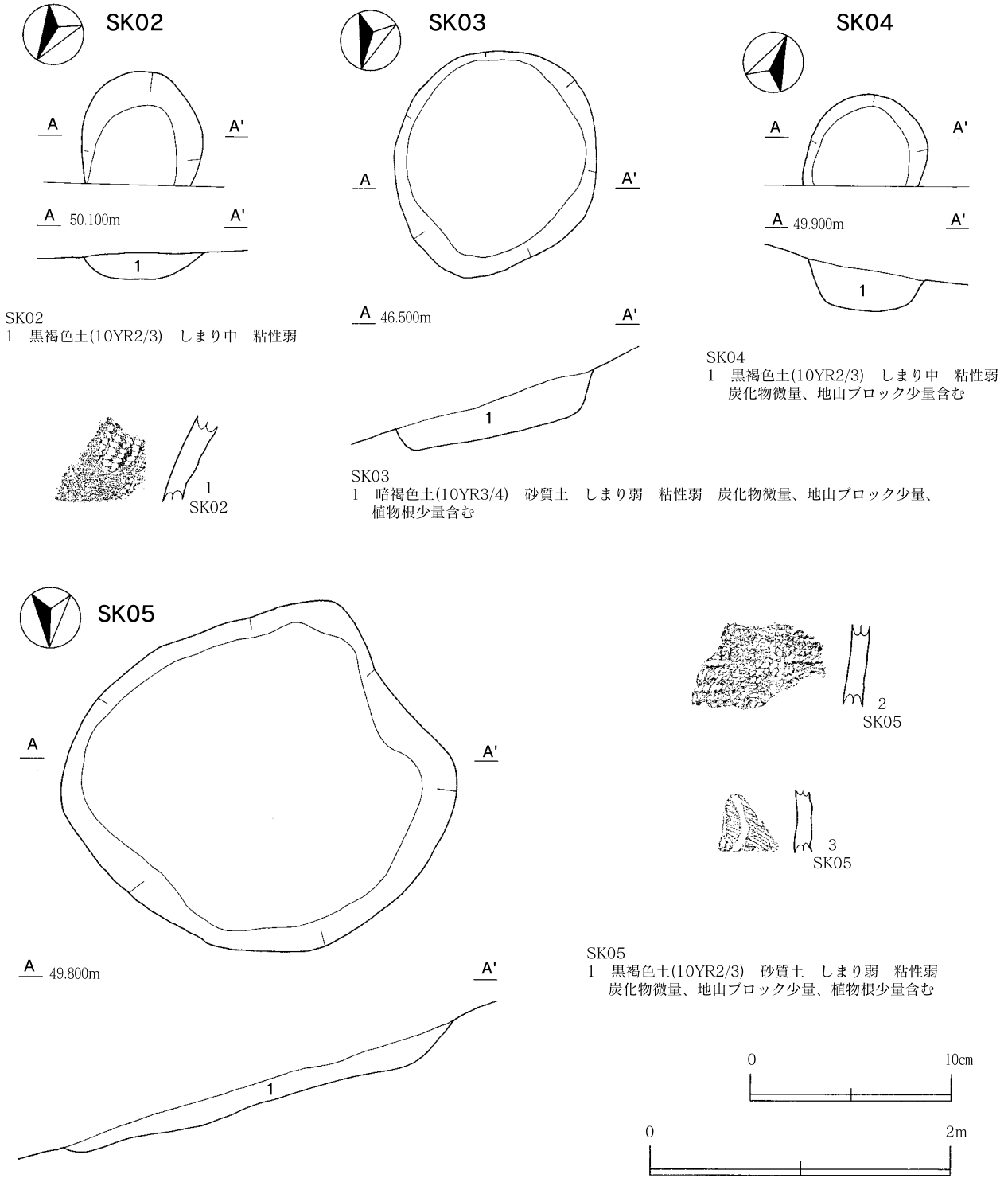
ＭＢ54・55グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。確認調査時のトレンチにより大部分が削平されており、長径170㎝、短径118㎝、最深部で27㎝の底面部のみが残存する。よって、全体像は不明であるが、残存する底面部が近接するＳＷ08と酷似することから本遺構も炭窯と判断した。残存する底部の覆土は３層に分層され、全体的に炭化物が交じり、３層は径３～15㎜の炭化材を多く含む炭化物層となっていた。底面はほぼ平坦で、特に北側では被熱により赤色変化した焼土が多く認められた。なお、採取した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、ＢＰ670±40の年代値が得られ、樹種はクリと同定された（第５章参照）。遺物は出土しなかった。

３.柱穴様ピット

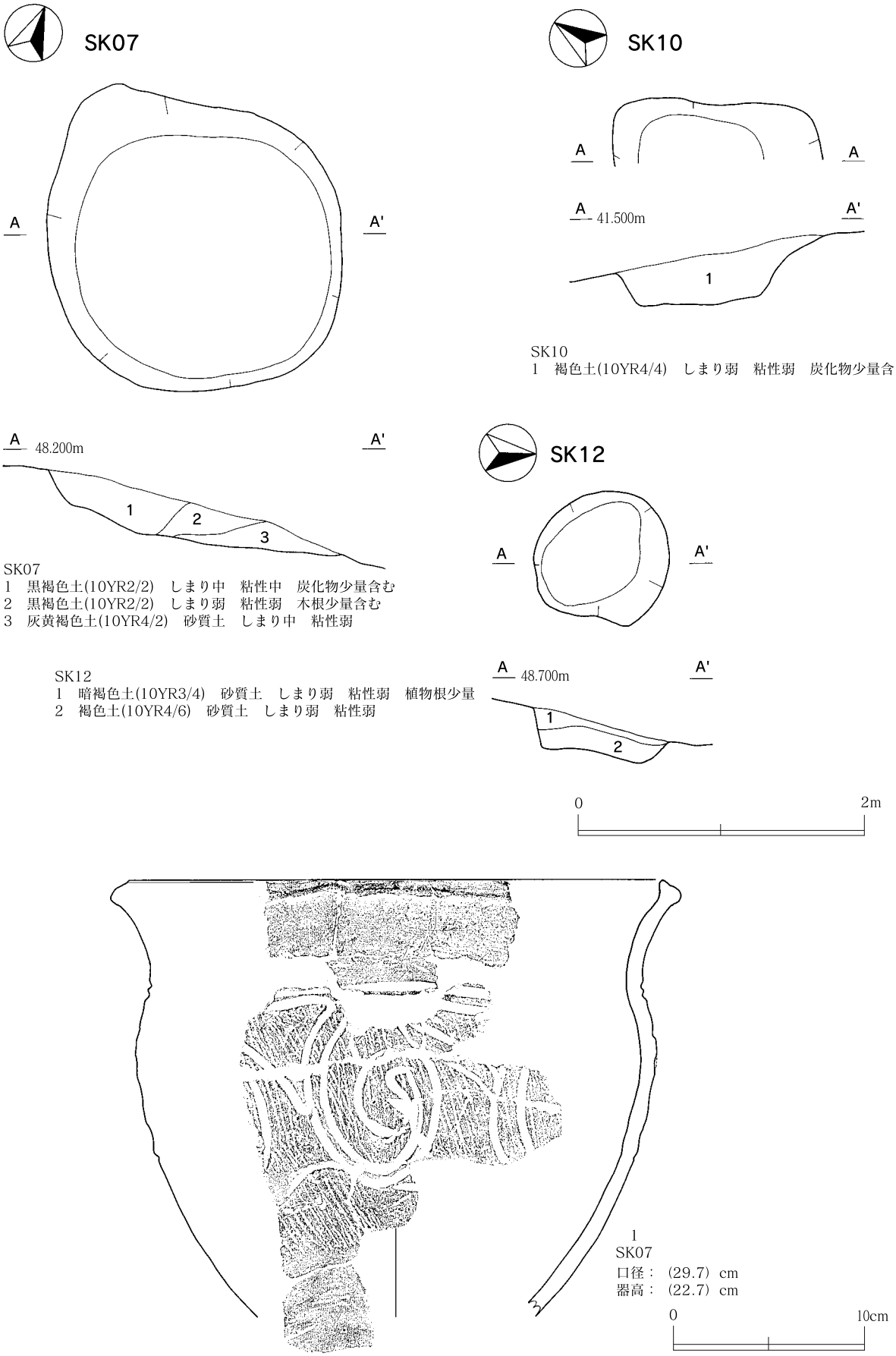
ＳＫＰ01（第10図、図版２）

調査区南端、ＬＬ38グリッドに位置し、Ⅲ層で確認した。確認調査時のトレンチによりほぼ半截さ

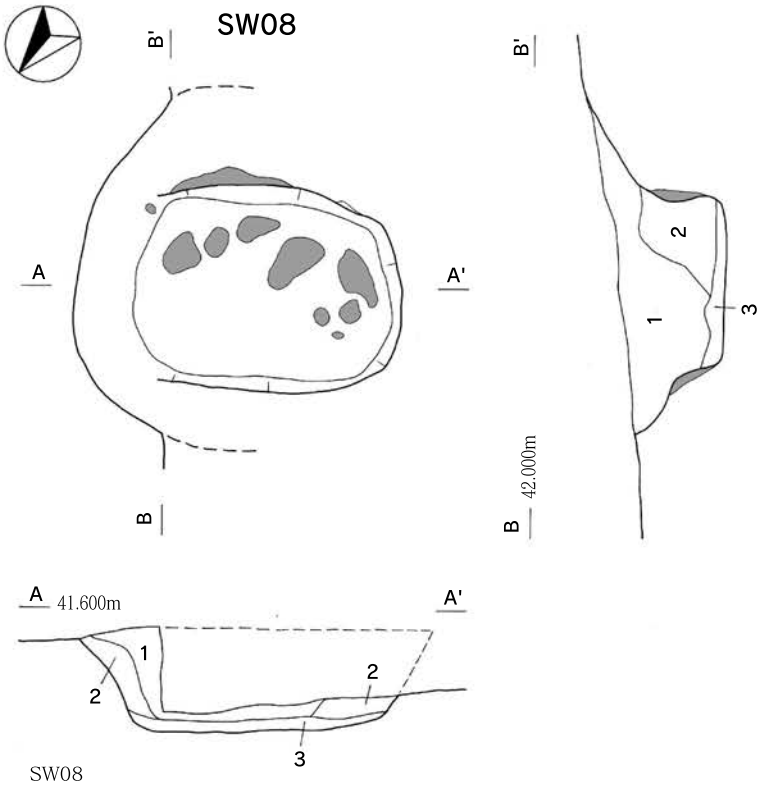
れており、全体径は不明だが、長径44㎝、短径32㎝の楕円形平面をなすと思われる。残存部の確認面から底面までの深さは36㎝である。覆土は黒褐色を基調としており、明褐色土や炭化物を含む単一層で、人為堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。



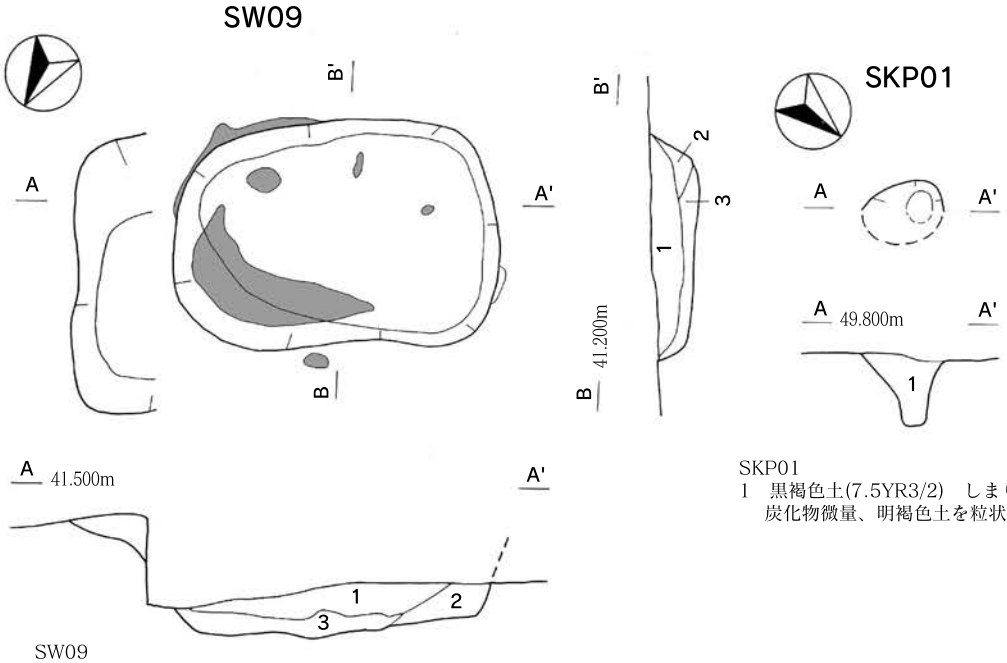
第８図　ＳＫ02・03・04・05平面図・断面図・出土遺物



第９図　ＳＫ07・10・12平面図・断面図・出土遺物



SW08
1　暗褐色土(10YR3/4)　砂質土　しまり中　粘性弱　炭化物少量、植物根少量、
　地山ブロック少量含む
2　褐色土(10YR4/6)　砂質土　しまり中　粘性弱　炭化物少量、植物根少量含む
3　黒色土(10YR1.7/1)　炭化物層　しまり弱　粘性弱　炭化物の径は5～15㎜



SKP01
1　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり中　粘性弱
　炭化物微量、明褐色土を粒状に微量含む

SW09
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり弱　粘性弱　炭化物少量含む
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり弱　粘性弱　炭化物微量含む
3　黒色土(10YR1.7/1)　炭化物層　しまり弱　粘性弱　炭化物の径は5～15㎜

第10図　ＳＷ08・09・ＳＫＰ01平面図・断面図

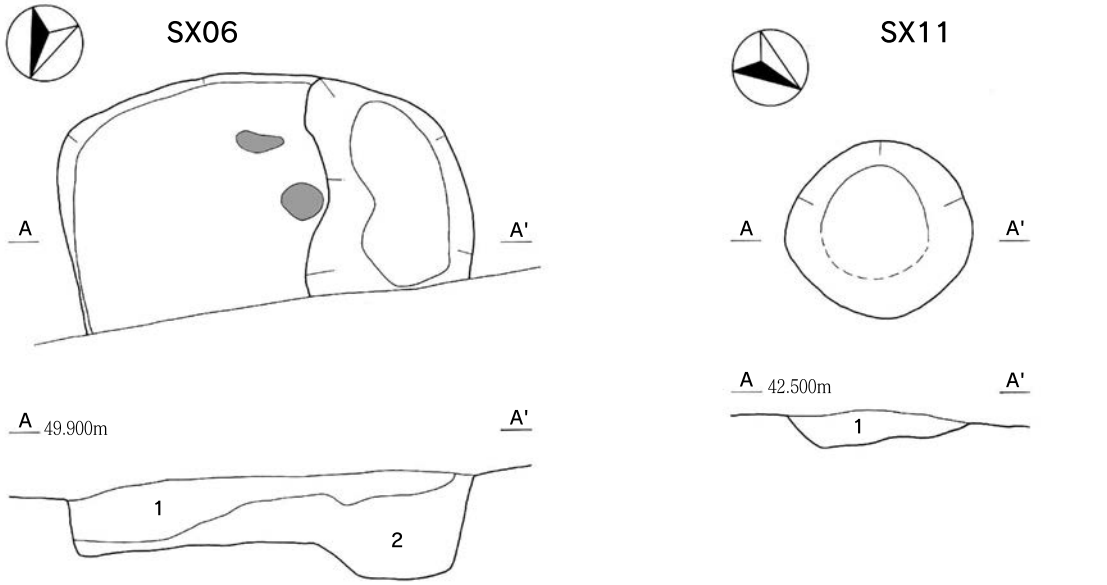
４.性格不明の遺構

ＳＸ06（第11図、図版２）

ＬＰ43・44グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。確認調査時のトレンチにより北西側が削られているが、現状で長径212㎝、短径124㎝の長方形平面をなす。底面は南西側が窪み、壁は急傾斜に立ち上がる。確認面から底面最深部までの深さは57㎝である。覆土は２層に分層した。１層は黒色を基調として径５～20㎜の炭化物を多く混入する。底面を覆う２層は、褐色を基調として径５～10㎜の炭化物を少量混入する。また、底面においては、中央部付近とそれよりも南東側付近の２箇所で被熱痕が観察された。なお、採取した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、ＢＰ640±40の年代値が得られ、樹種はブナ属と同定された（第５章参照）。本遺構は出土遺物も無く帰属時期は不明確であるが、放射性炭素年代測定による年代観、ならびに炭化物の集中と被熱痕の存在から、中世の炭窯である可能性がある。

ＳＸ11（第11図、図版２）

ＬＴ54グリッドに位置し、Ⅱ層で確認した。長径98㎝、短径94㎝の円形平面をなす。底面は平坦で、壁は全体的に緩やかに立ち上がり、確認面から底面までの深さは最深部で18㎝である。覆土は地山ブロックを多量に含んだ炭化物層の単一層で、炭化材を多量に検出した。採取した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、ＢＰ1310±30の年代値が得られ、樹種はクリと同定された（第５章参照）。炭窯の可能性も考えられるが、被熱痕は確認できなかった。遺物は出土しなかった。



SX06
1　黒色土(7.5YR1.7/1)　しまり弱　粘性弱　5～20㎜の炭化物少量、植物根少量含む
2　褐色土(10YR4/4)　砂質土　しまり中　粘性弱　5～20㎜の炭化物少量、植物根少量含む

SX11
1　炭化物層　地山ブロック多量含む

0　2m

第11図　ＳＸ06・11平面図・断面図

第３節　遺構外出土遺物

遺構外で出土した遺物は、縄文土器、土師器、石器などがある。このうち大多数は縄文時代の遺物で占められている。

１．土器

遺構外で出土した土器はほとんどが縄文土器で、他には土師器が散見される程度にすぎない。

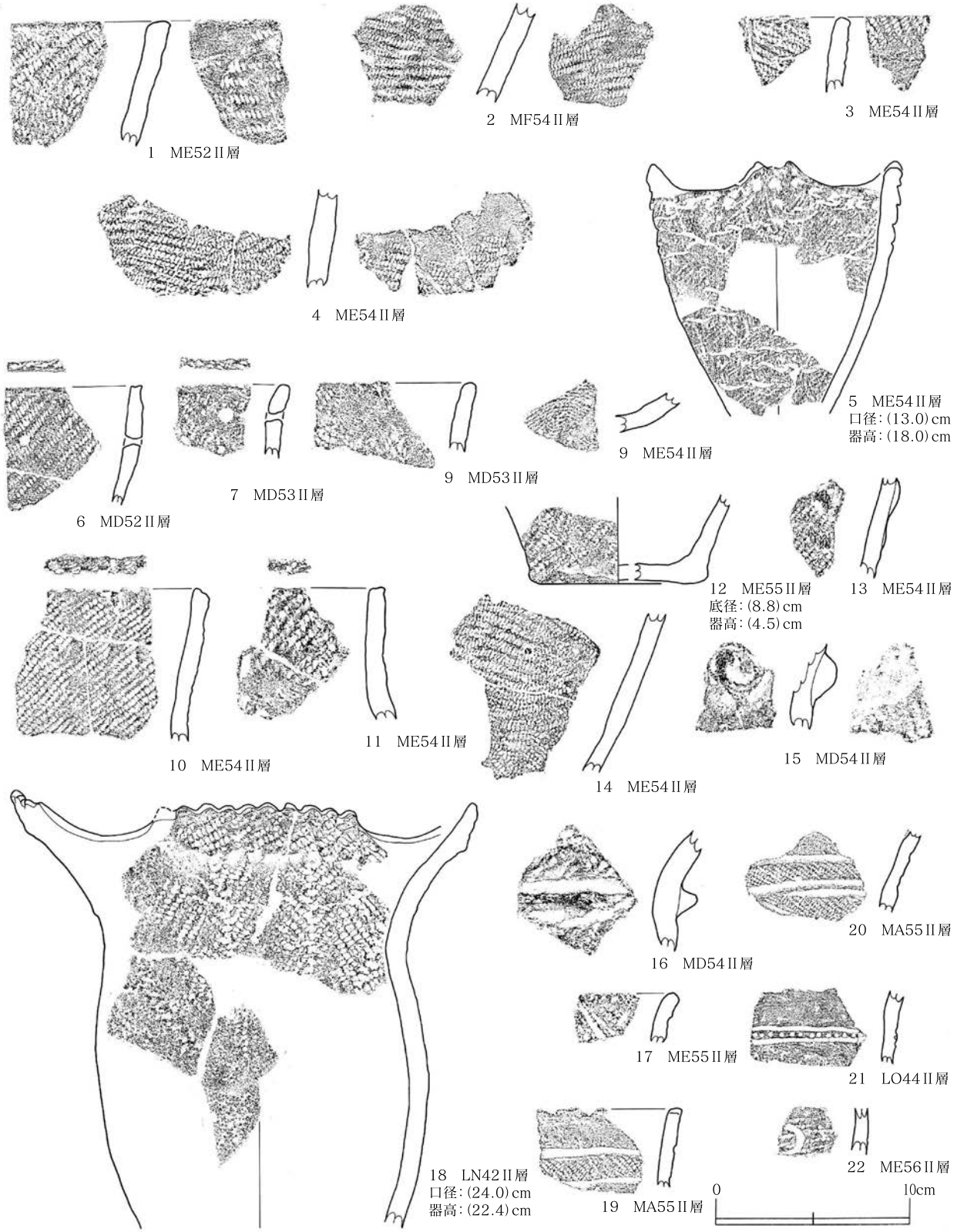
（１）縄文土器（第12・13図、図版３）

縄文時代の土器は早期・前期・後期のものが認められ、その多くは後期に属すると思われる。また、出土した土器はほとんどが小破片であり、全体の形を知ることは難しく、明確に深鉢形以外の器形を示すものは見られない。

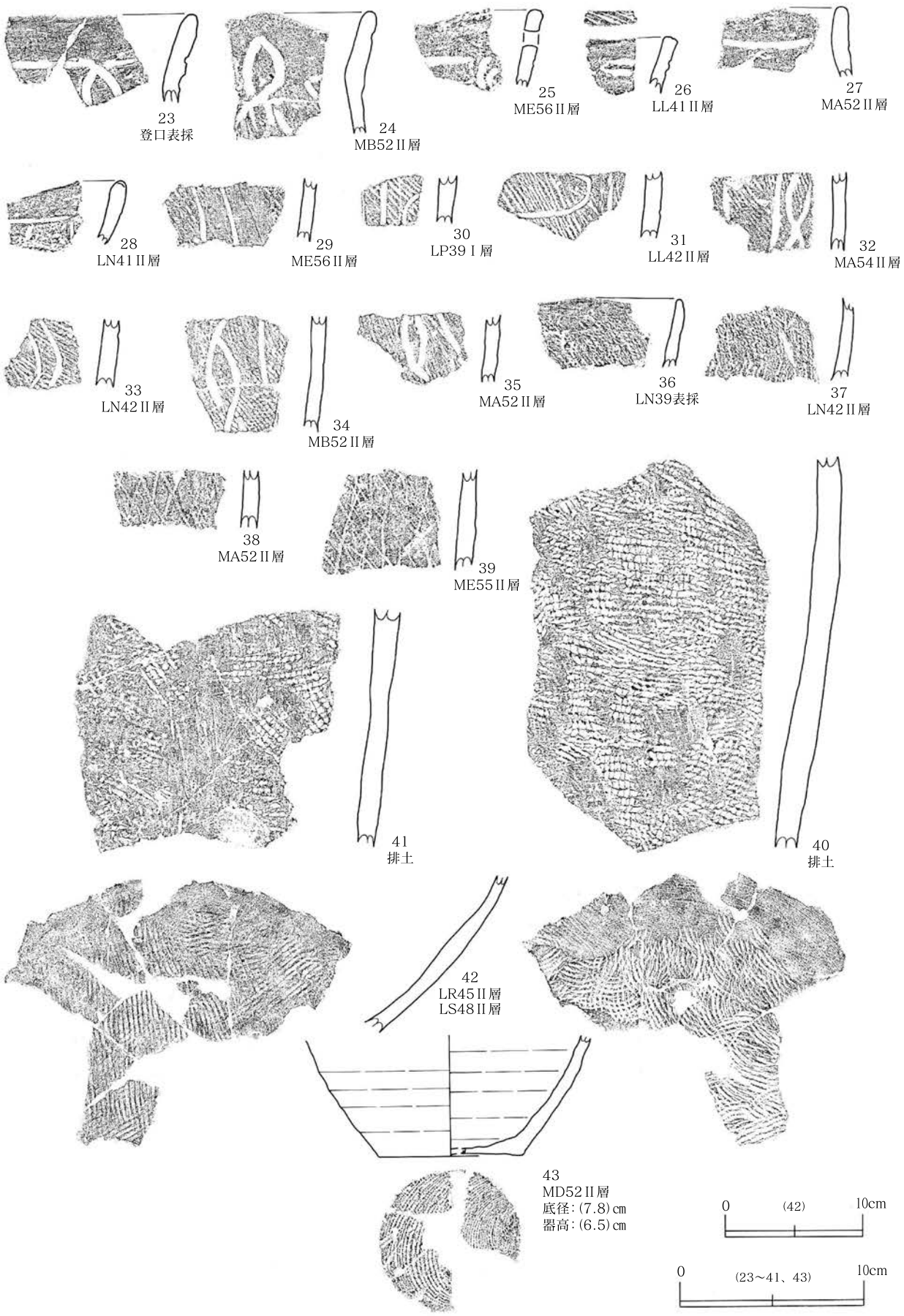
１～４は、内外面に縄文を施文した土器である。１は、外面に羽状縄文、内面に横走状の縄文を施している。２と４は同一個体で、外面は０段多条のＬＲ縄文原体を斜位回転させ、横走縄文を施している。内面にも同じ原体で施文している。３は摩滅が著しくはっきりとしないが、内外面の他に口唇部にも縄文を確認できる。５は結節回転文を地文とし、山形の突起をもつ小波状の口縁部には、半截竹管による押引文が横位に巡らされ、突起部には押引文に直交するように同様の施文がなされる。大木２a式に比定されるものと考えられる。６はＬＲ縄文原体を縦位回転させ施文し、口唇部にも同じ原体で施文している。補修孔を有する。７・８は同一個体と考える。著しく摩滅しており、はっきりとは確認できないが、単節ＬＲの縄文原体を横位回転させ地文としている。８の口唇部にはわずかではあるが縄の押圧痕が認められる。９は底辺部の破片で、撚糸文が施されている。10は単節ＬＲの縄文原体を横位回転施文している。口唇部には縄を押圧して細かいきざみを形成している。11は口縁部破片で、ＬＲ縄文原体を横位回転させている。口唇部にも施文されているが、摩滅していて詳細は分からない。12は深鉢形土器の底部である。出土層位と胎土から前期の土器と考えられる。13は激しく摩滅しており小破片であるが、口縁部の破片と考えられる。粘土紐貼付による隆帯が認められ、鋸歯状を呈することから、大木４式土器の可能性がある。14は胴部破片で、非結束羽状縄文が施されている。15は欠損部分が多いものの、渦巻状の隆帯が貼り付けられている。16は外反する頸部の破片で、粘土紐貼付による隆帯が横位に巡り、円筒下層ｂ式に比定される。17は口縁部の小破片で、鋸歯状もしくは小波状の沈線が確認できることから、大木５式土器の可能性がある。18は深鉢形の土器である。外反する口縁部は、切り込みをもつ幅広の鋸歯状貼付文で構成され、胴部には結束羽状縄文が展開する。大木５式土器に比定される。19・20は同一個体と考える。19の口唇部には刻みが施される。口縁直下には２条の沈線が横位に巡り、後期後葉のものと考えられる。21は口縁直下の破片と考えられ、横走する平行沈線の間には列点が加えられる。22～29は口縁部付近に沈線を施している資料である。30～35は縄文や撚糸文を地文とし、数条の沈線が施されている。36・37は同一個体と考える。36は緩やかに外反する小波状の口縁部である。37は胴部で、撚糸文が施されている。38・39は網目状撚糸文が施され、同一個体と考える。40・41は確認調査時に出土した大型の土器片で、同一個体である。施文法に規則性は窺えず、縄文原体をランダムに転がし地文としている。

（２）古代の土器（第13図、図版３）

古代の土器は全部で十数点の土師器片が出土した。ここでは、接合作業の結果、器形を窺えるまでに復元できた２点を図示する。42は土師器の鍋である。外面にはタタキ目、内面には当て具痕が認められる。43は、底面に回転糸切り痕を残すロクロで成形された土師器の甕である。



第12図　遺構外出土土器（１）



第13図　遺構外出土土器（2）

２.石器

出土した石器類には石槍、石匙、石箆、スクレイパー、磨石、半円状扁平打製石器、凹石、有溝礫石器、磨製石斧、打製石斧、石錘の外、剥片がある。帰属する時期は明確でないが、遺跡内で混在して出土する土器は縄文時代後期を主体としており、これらの石器も概ね縄文時代後期の所産と思われる。ここでは、出土した全ての製品（製品に近いものも含む）を図示する。

（１）石槍（第14図、図版４）

３点出土している。１・２・３は平行剥離により整った形状を有する。１は、粗い剥離で大まかに整形した後、縁辺部に細かい調整剥離を施している。一部主要剥離面が確認できる。

（２）石匙（第14・15図、図版４）

９点出土している。４・５・６は、一側縁が長く主要剥離面側への調整が少ないもので、かつ先端が尖る資料である。４は縦長の剥片を素材とし、側縁全周に調整剥離を施している。５・６は、表面全面に調整剥離を施し整形している。４・５・６とも主要剥離面への調整はつまみ部付近のみである。７・８は先端部が欠損しているが、側縁全周に調整剥離を施しているものと思われる。主要剥離面への調整は８では認められないが、７はつまみ部付近に施されている。９・10・12はいずれも縦長の剥片を素材としており、主要剥離面右側縁に調整剥離を施している。９は丁寧に調整剥離を施し整形している。10は全体的に粗い剥離で整形している。12はつまみ部が欠損しているが、残存部の形状から石匙に分類した。11は唯一の横型石匙である。横長剥片を素材とし、側縁全周に調整剥離を施している。主要剥離面側への調整剥離は、つまみ部付近のみである。

（３）石箆（第15・16図、図版４）

６点出土している。13は、確認調査時に出土した資料で、左側縁部への調整が顕著に認められるが全体的に調整は粗い。14・16・17・18は主要剥離面を広く残す資料である。いずれも刃部は直刃状を呈するが、調整は粗く、17は先端部が欠損している。15は、一部欠損しているが、主要剥離面側、特に縁辺部への調整剥離が集中している。刃部形状は丸刃状である。

（４）スクレイパー（第16図、図版４）

１点出土している。19は横長剥片を素材とし、表面全面に調整剥離を施している。主要剥離面側へも上部・右側縁部を中心にほぼ全面にわたって調整剥離を施している。両側縁に調整が施されていることからサイドスクレイパーに分類できる。

（５）磨石（第16図、図版４）

４点出土している。21は楕円形状の礫の広い両平坦面に摩擦痕が認められる。20は礫の一側縁に、22は一側縁と平坦面の一部に摩擦痕が認められる。22の先端部には敲打痕を有することから、敲石としても使用されたことが窺える。23は楕円形状の礫の平坦面の片側一部に摩擦の痕跡が認められる。凹石として転用されており、両平坦面と両側縁に凹みを有する。

（６）半円状扁平打製石器（第16図、図版４）

１点出土している。24は、扁平な楕円形状の礫の長軸側側縁に敲打による剥離が施されている。また、両短軸側には抉りを有する。

（７）凹石（第17図、図版４）

２点出土している。25・26は、礫の片面に一つ、もう一方の面には複数個の凹みを有する資料である。

（８）有溝礫石器（第17図、図版４）

２点出土している。27は、凹石としても使用されており、摩擦に伴うと考えられる細い筋が、凹みの範囲と重複して数条確認できる。28は、摩擦によるものなのか敲打によるものなのか判然としないが、浅い溝が10条前後確認できる。用途は不明である。

（９）磨製石斧（第17図、図版４）

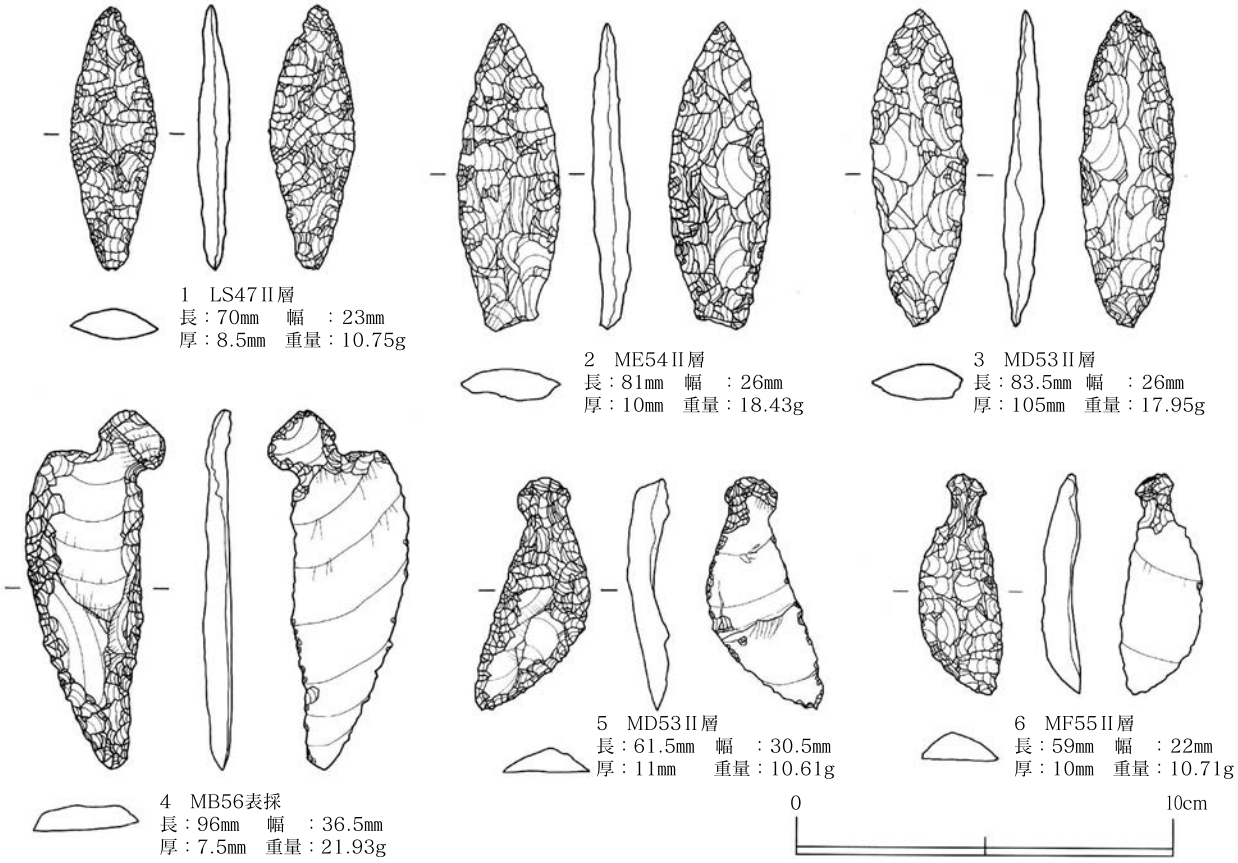
２点出土している。29は基部、30は刃部のみの資料である。29はどの面も丁寧に磨り上げられている。30は両側縁が研磨され、石斧主面との間に稜を作り出している。いわゆる定角式磨製石斧と考えられる。

(10)打製石斧（第17図、図版４）

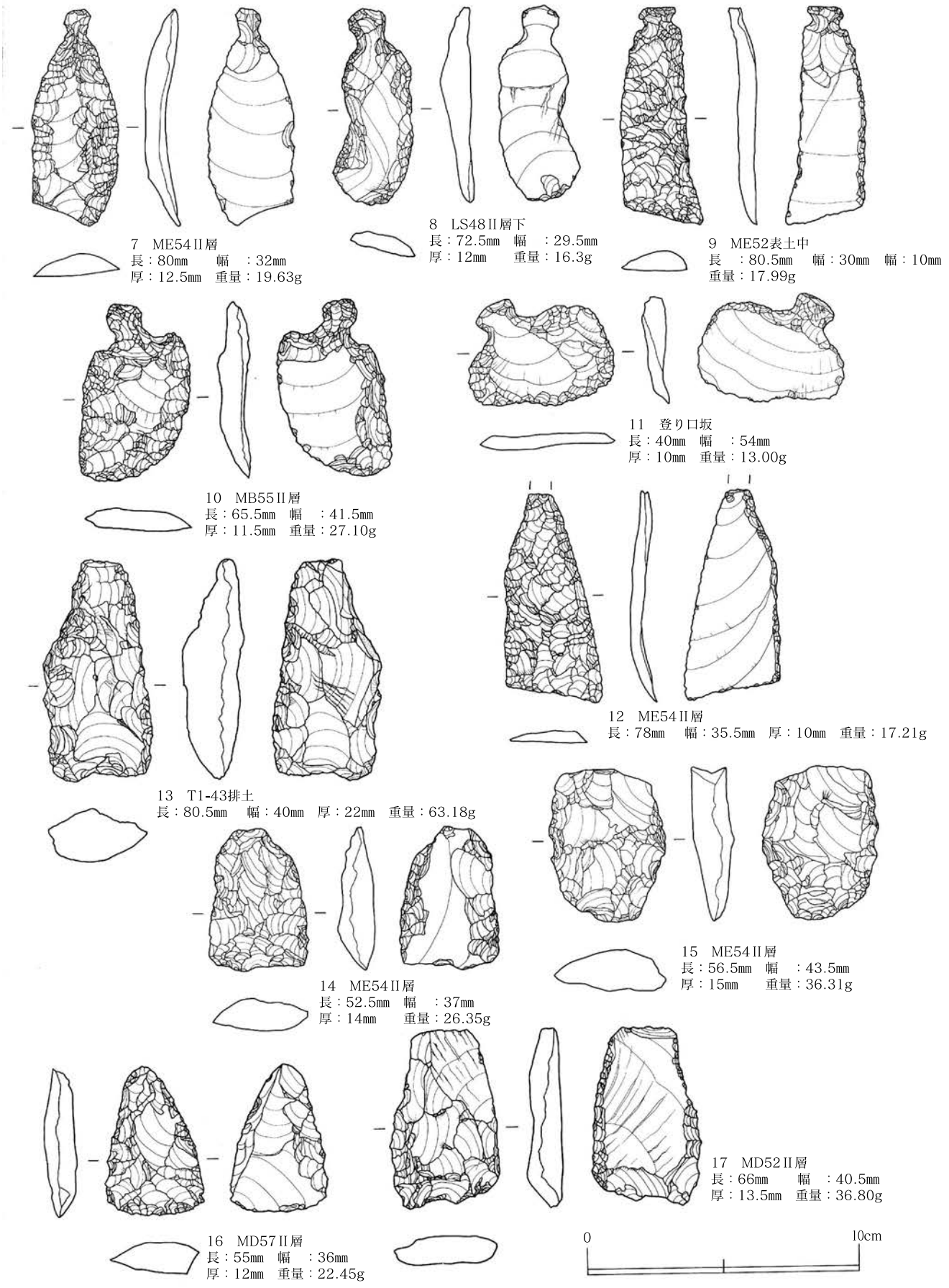
１点出土している。31は撥形の打製石斧である。刃部は両刃で円刃状を呈する。

(11)石錘（第17図、図版４）

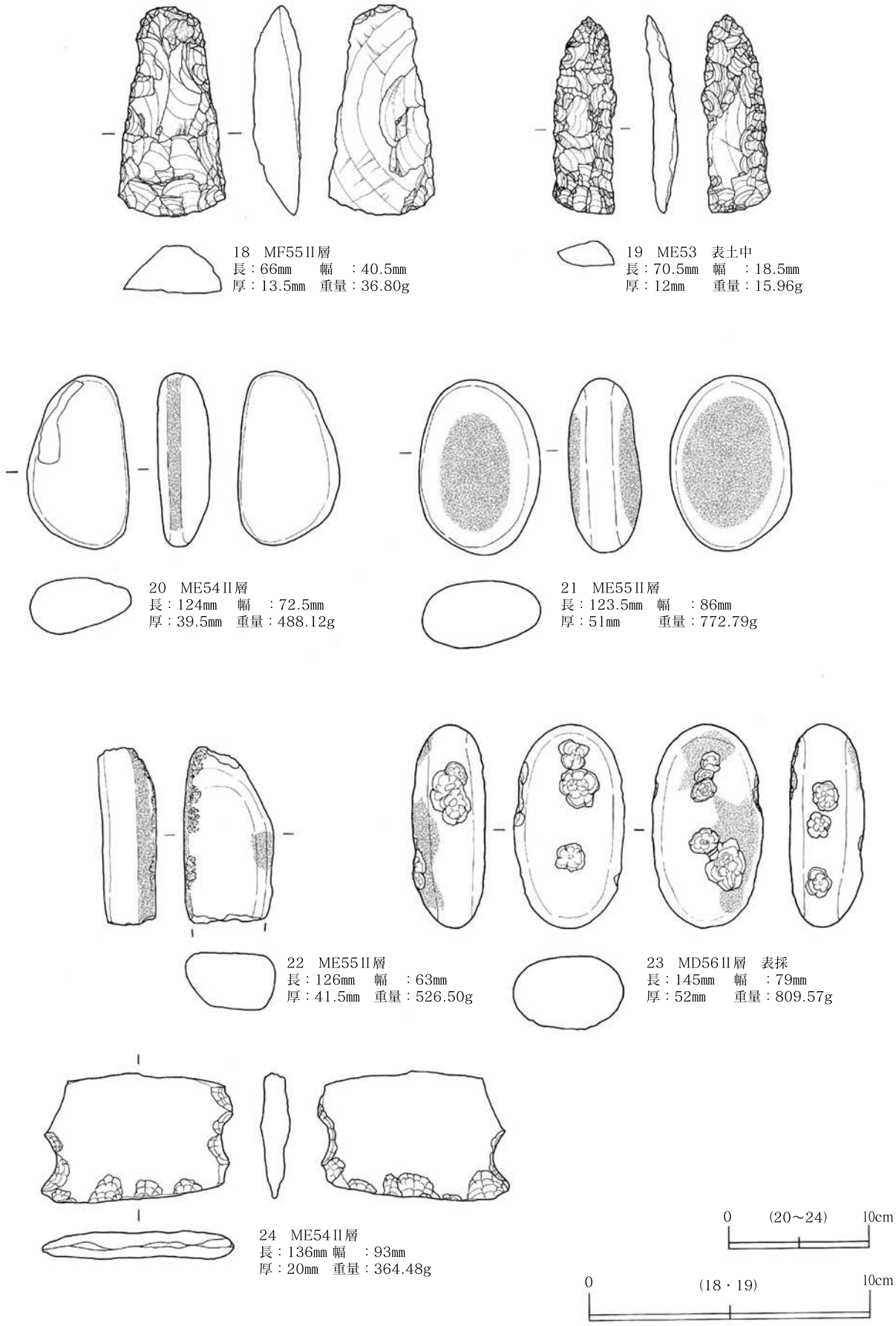
１点出土している。32は扁平な円礫の長軸方向両端を打ち欠いて切込みを作り出している切目石錘である。



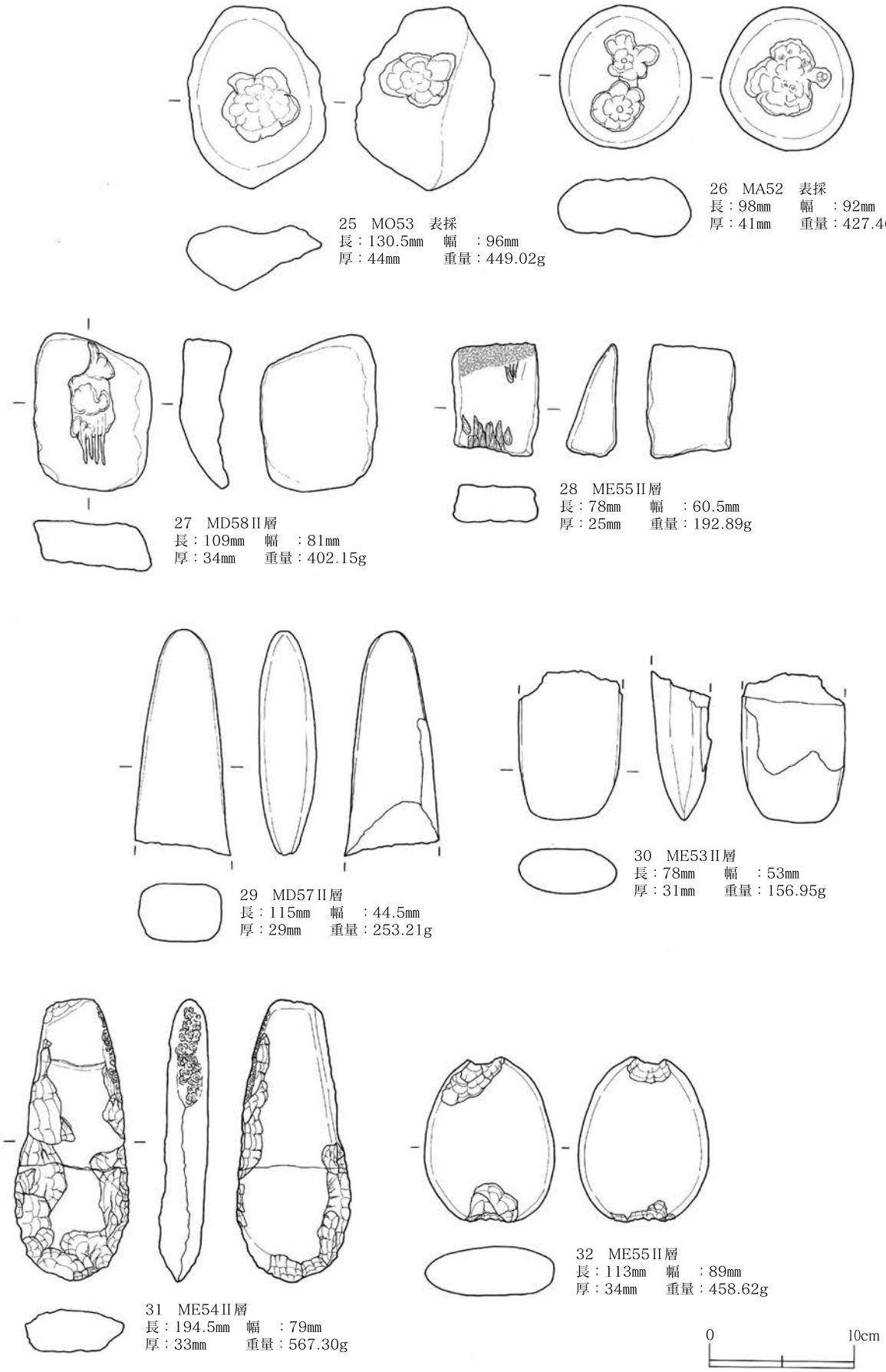
第14図　遺構外出土石器（１）石槍・石匙



第15図　遺構外出土石器（２）石匙・石箆



第16図　遺構外出土石器（３）石箆・スクレイパー・磨石・半円状扁平打製石器



第17図　遺構外出土石器（３）凹石・有溝礫石器・磨製石斧・打製石斧・石錘

第５章　自然科学的分析

はじめに

秋田県由利本荘市西目町寺ヶ沢Ⅲ遺跡は、縄文時代前期および後期の遺物散布地として知られている。今回の調査では、各種遺構や堆積層中から炭化物が出土している。これらの炭化物については、遺構や堆積層の年代を推定するために放射性炭素年代測定が実施されており、このうち一部の炭化材については、古植生や木材利用に関する資料を得るために樹種同定を実施した。

１．試料

試料は、４基の遺構（ＳＷ・ＳＸ）から出土した炭化材４点（試料番号１－４）と、ＭＤ53Ⅱ層から出土した炭化材１点（試料番号５）の合計５点である。

２．分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998)、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1990)、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にした。

３．結果

樹種同定結果を第３表に示す。炭化材は、落葉広葉樹３種類（ブナ属・クリ・ケヤキ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ブナ属（*Fagus*）　　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２－３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３－５列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－15細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*(Thunb.)Makino)

環孔材で、孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接戦・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－６細胞幅、１－50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

４．考察

炭化材は、４基の遺構内（ＳＷ08,09,ＳＸ06,11）と堆積層（ＭＤ53Ⅱ層）から出土している。各遺構の性格等の詳細は不明であるが、遺構内出土炭化材の年代測定値は古代～中世に相当する。これらの炭化材には３種類（ブナ属・クリ・ケヤキ）が認められ、クリが３点、ブナ属とケヤキは各１点であった。ＳＷ08,09,ＳＸ11の３基から出土した炭化材がクリであり、ＳＸ06の炭化材はブナ属であった。この結果から、遺構内ではクリの利用が多かったことが推定され、これが燃料材であれば、周辺の植生から樹種を選択していた可能性もある。なお、ＳＸ06から出土した炭化材（ブナ属）は、直径約1.5㎝の芯持丸木で樹皮が付いており、年輪数は７本であった。最外年輪の形成状況をみると、早材部の形成は終了している。晩材部形成は終了しており、翌年の早材部の一部が形成されつつある状況であった。この結果から、木材が生長を止めたのは早春と考えられ、その頃に伐採された可能性がある。

遺構外の堆積層中から出土した炭化材の年代測定値は縄文時代に相当し、樹種はケヤキであった。堆積層からの出土であるが、炭化していることから、燃料への利用など何らかの理由により火を受けていることが推定される。また、ケヤキが有用材であることを考慮すれば、何らかの目的で製品などに利用されていた可能性もあるが、詳細は不明である。

今後、年代測定結果とともに、遺構の性格や炭化材の出土状況も含めたさらなる検討がのぞまれる。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹林の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹林の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176.

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹林の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹林の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹林の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説　木材組織．地球社，176ｐ．

Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹林の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．

伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122ｐ．[Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

第３表　樹種同定および放射性炭素年代測定結果

試料番号	出土地点	層 位	樹 種	補正年代（ＢＰ）	δ13C(‰)	δ13C補正無し（ＢＰ）	Code.No.
1	ＳＷ08	—	クリ	750±30	-24.35±0.80	730±30	IAAA-50944
2	ＳＷ09	—	クリ	670±40	-25.05±1.02	670±30	IAAA-50945
3	ＳＸ06	—	ブナ属	640±40	-25.97±1.06	660±30	IAAA-50946
4	ＳＸ11	—	クリ	1310±30	-25.91±0.71	1320±30	IAAA-50947
5	ＭＤ53	Ⅱ層	ケヤキ	3000±40	-31.07±0.72	3100±30	IAAA-50948
6	ＭＤ58	Ⅱ層	—	3010±40	-35.64±0.75	3190±40	IAAA-50949
7	ＬＰ43	Ⅰ層	—	610±30	-27.46±0.90	650±30	IAAA-50950

１）測定は、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による。
２）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
３）ＢＰ年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

第６章　まとめ

寺ヶ沢Ⅲ遺跡の発掘調査は、平成17（2005）年５月18日から７月28日まで行われ、調査の結果、土坑７基、炭窯２基、柱穴様ピット１基、性格不明遺構２基が検出され、遺物は主に縄文時代の土器や石器、平安時代の土師器が出土した。また、検出された遺構のうち、時代を特定できる遺構は縄文時代の土坑３基、中世と考えられる炭窯２基の計５基のみである。遺構・遺物とも稀薄なため、本遺跡の性格等を明らかにすることは難しいが、それら遺構・遺物から推定されることを記し、まとめとしたい。

調査区内から住居跡や焼土等が検出されなかったので、本遺跡は集落などの居住域としては機能していなかったものと推察されるが、第４章で述べたように、本遺跡で出土した縄文土器の帰属時期は早期、前期、後期であり、散発的ではあるが平安時代の土師器も出土していることから、遺跡が断続的に利用されていたことが窺われる。特に、点数は少ないものの縄文時代の石器が十数種類出土したことから、当時の生活の拠点は本遺跡の南に隣接する台地上に存在するものと思われる。

調査区北西側で検出された２基の炭窯は、確認調査時のトレンチで大半が削平されているが、残存部の形状から小型伏焼炭窯と考える。小型伏焼炭窯は、土坑状の簡便な構造で、県内では平安時代、小型の製鉄炉の木炭窯として用いられたほか､近代から現代にわたり日常生活用としても利用された。最近の発掘調査では、三種町（旧琴丘町）の小林遺跡や堂の下遺跡などで多数検出されている。

本遺跡の炭窯は、調査区内で製鉄炉や鍛冶遺構が検出されなかったことから、日常生活用の炭窯である可能性が高いと考える。また、帰属時期については遺構内出土の土器が無く、はっきりしないものの、炭化物の放射性炭素年代測定においては中世の初め頃の遺構という結果が出ている（第４章参照)。

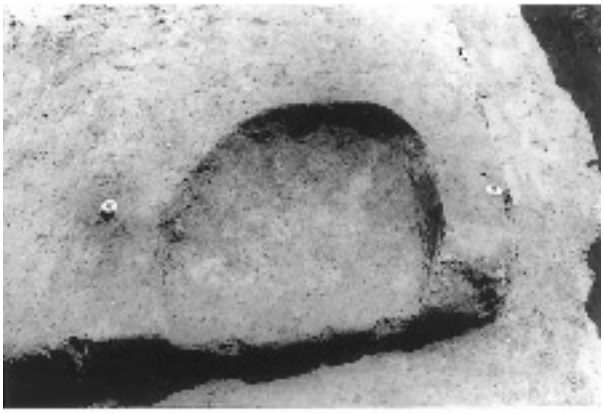
よって、２基の炭窯は、中世の日常生活の場で利用されていた遺構と言えよう。しかし、本遺跡の北東300ｍほどにある寺ヶ沢Ⅱ遺跡では、平安時代に属する鉄滓や羽口が見つかっており、２基の炭窯は平安時代の鉄生産関連遺構という可能性も否定できない。

参考文献

秋田県教育委員会　『小林遺跡Ⅱ　平安時代・中世篇』秋田県文化財調査報告書第376集　2004（平成16）年

秋田県教育委員会　『堂の下遺跡Ⅱ　中世篇（第一分冊）・(第二分冊)』秋田県文化財調査報告書第377集　2004（平成16）年

調査区全景（北から）



ＳＫ02完掘（北西から）

ＳＫ03完掘（北から）

ＳＫ04完掘（南から）

ＳＫ05完掘（北から）

ＳＫ07完掘（南から）

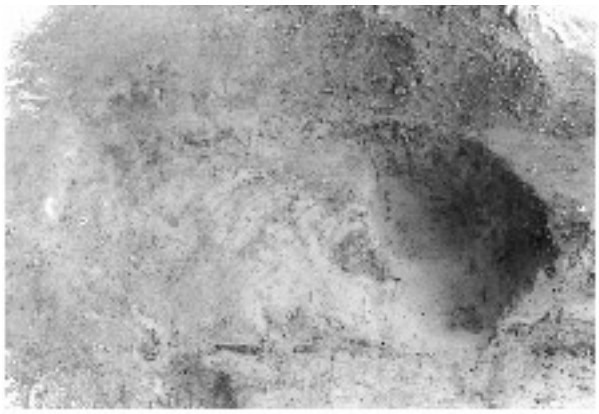
ＳＫ10，ＳＷ08・09完掘（南西から）

ＳＫ12完掘（東から）

ＳＷ08完掘（西から）

ＳＷ09，ＳＫ10完掘（南西から）

ＳＫＰ01断面（北東から）



ＳＸ06完掘（北から）

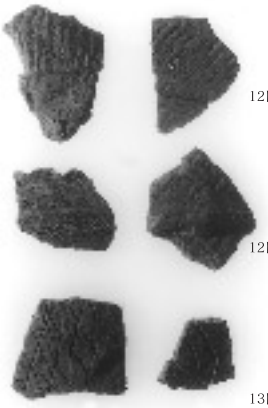
ＳＸ11検出（北から）

SK07
9図-1

12図-18

12図
1～3
表　裏

12図-5



12図-14　12図-6
12図-19　12図-16
13図-39　13図-33

12図-7

12図-8

12図-9

12図-22

12図-10

12図-14

12図-21

13図-36

13図-29

13図-23

13図-37

13図-26

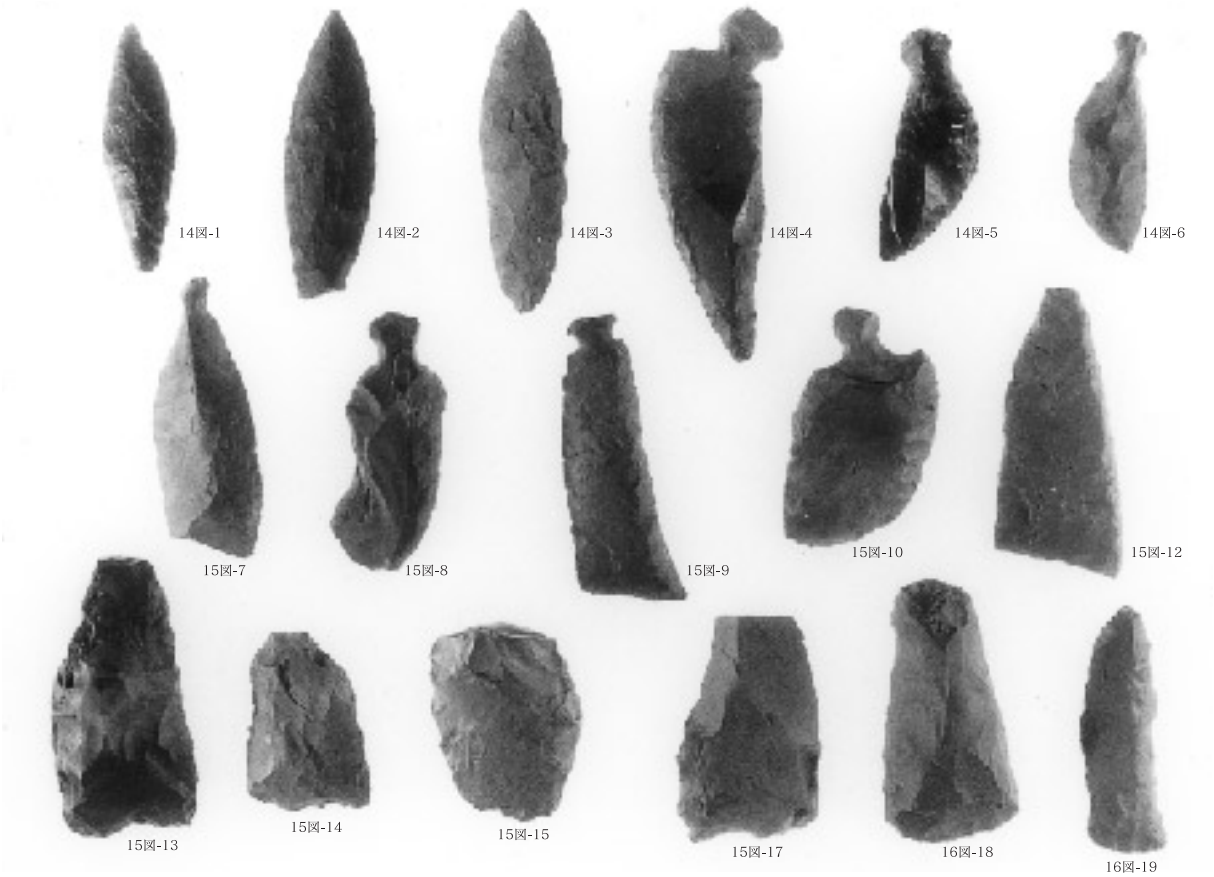
13図-34

13図-24

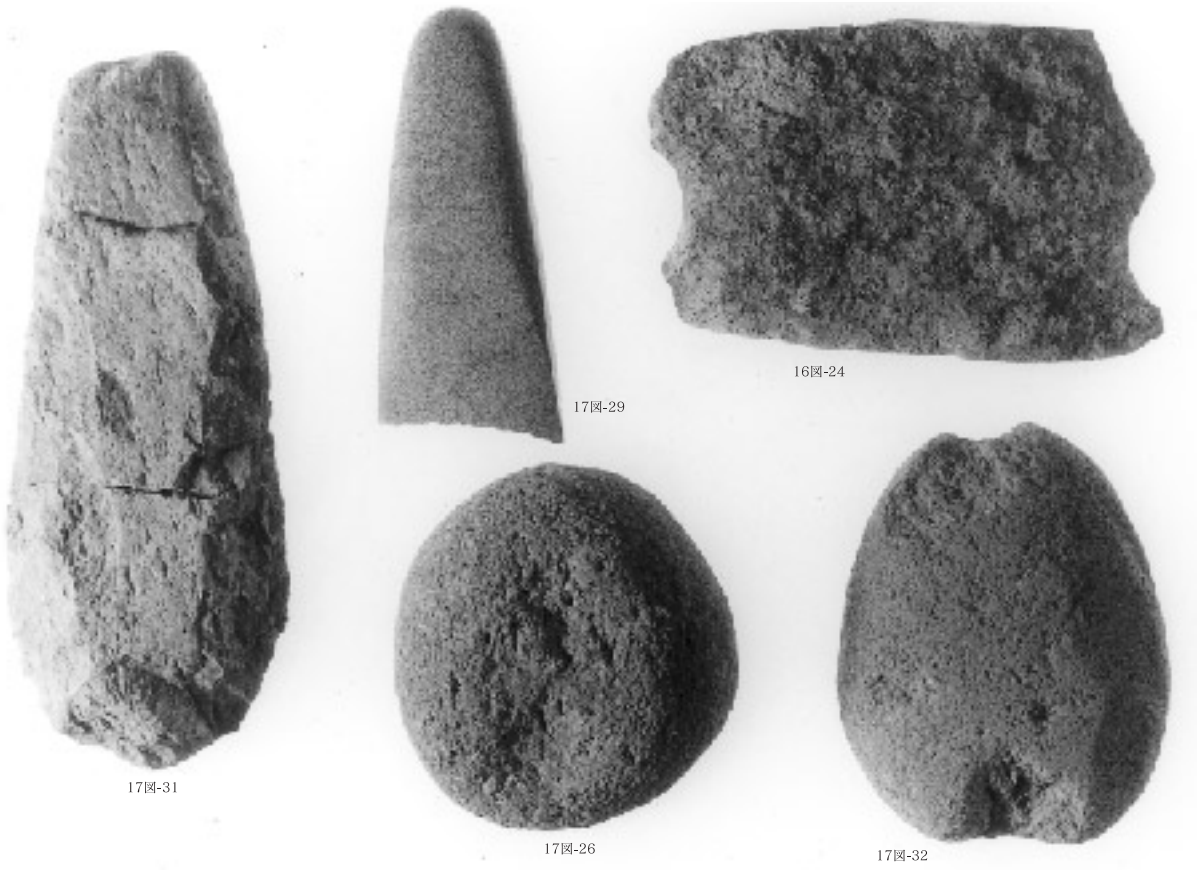
13図-38

13図-30

遺構内・外出土土器



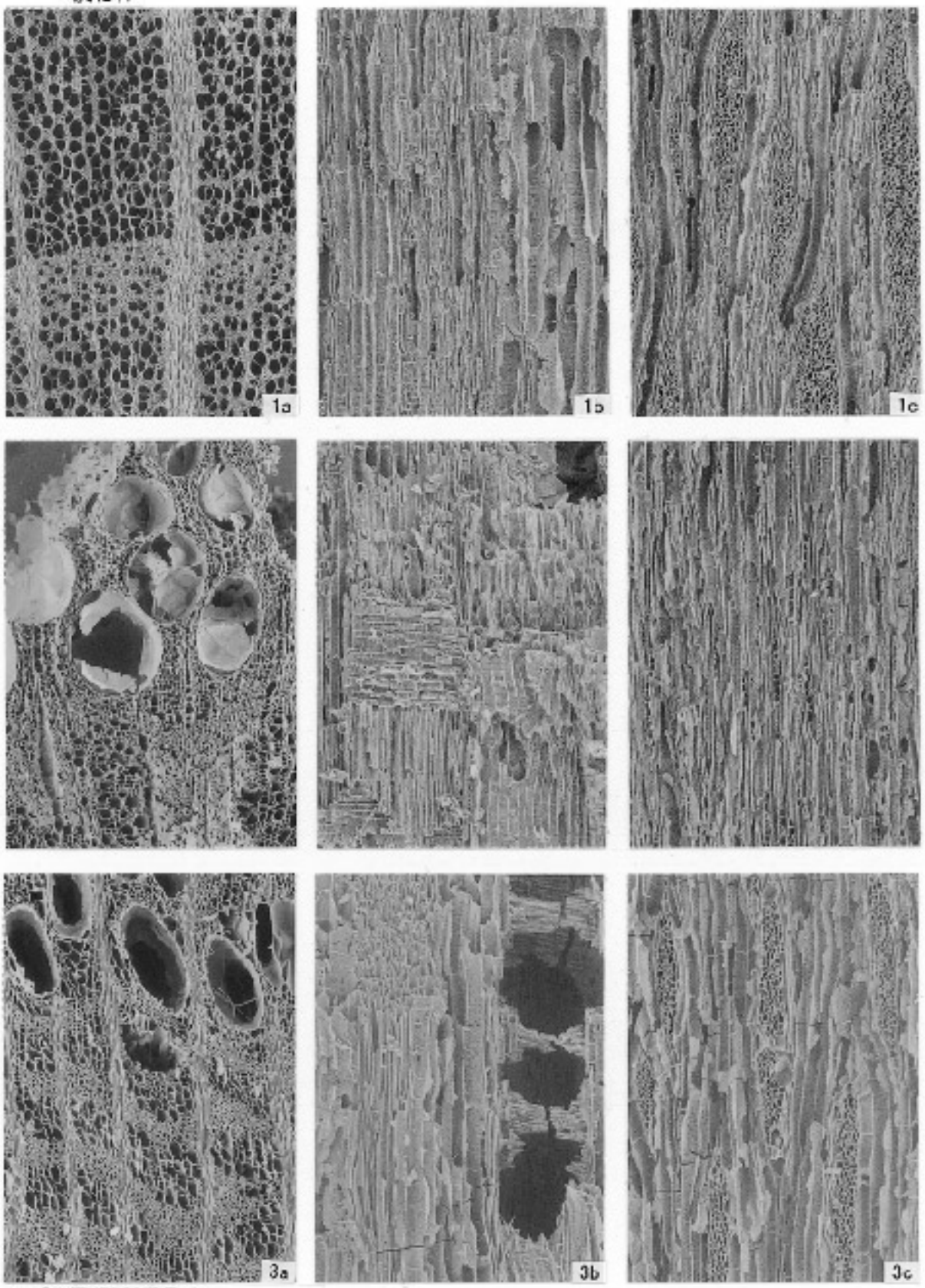
遺構外出土剥片石器



遺構外出土礫石器

図版5

炭化材



1. ブナ属(試料番号3)
2. クリ(試料番号2)
3. ケヤキ(試料番号5)
a:木口, b:柾目, c:板目

200μm:a
200μm:b,c

報　告　書　抄　録

ふりがな	てらがさわさんいせき
書　　名	寺ヶ沢Ⅲ遺跡
副　書　名	一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅰ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第419集
編 著 者 名	吉川寿朗
編 集 機 関	秋田県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　電話(0187)69-3331
発行年月日	西暦2007年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
寺ヶ沢Ⅲ遺跡 (てらがさわさんいせき)	秋田県 由利本荘市 西目町西目 字寺ヶ沢 69-27 (あきたけん ゆりほんじょうし にしめまちにしめ あざてらがさわ)	052108	―	39° 18′ 57″	140° 00′ 27″	20050518 ～ 20050728	2,600㎡	一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
寺ヶ沢Ⅲ遺跡	遺物散布地	縄文時代	土坑　3基	縄文土器 石器	遺構や遺物の数は少なかったものの、縄文時代の土器や石器がある程度まとまった量出土した。
		古代	性格不明遺構　1基	土師器	
		中世	炭窯　2基 性格不明遺構　1基		
		時代不明	土坑　4基 柱穴様ピット　1基		

秋田県文化財調査報告書第419集

寺ヶ沢Ⅲ遺跡

－ 一般国道7号仁賀保本荘道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－

印刷・発行　平成19年3月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802
大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331　FAX(0187)69-3330
発　　行　秋　田　県　教　育　委　員　会
〒010-8580
秋田市山王３丁目１番１号
電話（０１８）８６０－５１９３
印　　刷　株式会社三戸印刷所